新島襄をめぐる人々

福士屋卯之吉と新島七五三太

――その時代背景とめぐりあい――

千代　肇

新島七五三太が国禁を犯して箱館から脱国したことは、新島自身にとっても同志社の歴史の上でも重要な意味を持っている。自由に欧米へ留学が許されず、密航者としての身分扱いを受けるばかりか、幇助者も親族も法を犯した重い罰を受けなければならなかった。

密航者の処刑は重罪人として刑を受けなければならなかったであろうし、新島も充分に承知で行動を起した。その動機は、快風丸に乗船した一八六四（元治元）年三月に脱国を考えていたのかどうか。四月二十一日から福士屋卯之吉（福士成豊）に海外脱出を打明けた五月二十四日までの箱館滞在中に決断したのだろうか。快風丸便乗のときすでに脱国を決意していたとするならば、計画

的行動が箱館滞在中にみられたと思うが、これまでのところ新島関係資料では、井上勝也氏が指摘している自叙伝 My Younger Days に「ここ（箱館）では私は幾人かの外国人に接近することをもくろんでいた。それは彼らの特別の好意によって逃亡を企てんがためであった。」とある。逃亡とは日本脱出である。新島が密航の心中をあかしたのは日本人でなくロシア人のニコライ宣教師であった。井上氏によると新島の自叙伝の中に「ロシア人の僧侶の家にはほぼ一カ月間生活をともにしてから、私は徐々に私の心に秘めた目的を彼に語り、それを遂行するために彼の援助を求めた。日本が一番必要なことは道徳的改革であり、私が確信する限り、その改革はキリスト教によってなされねばならない、と私はそのとき彼に語った。彼は私の話に大変喜んだが、私が彼に打ち明けたような計画には反対して、私に警告した。私は彼の警告に失望し、外国人居留地で友人を探し始めた」。この文章が書かれたのは帰国後で同志社におられたときであるが井上氏は「函楯ニ於テニコライニ寄スルノ書」と表記の書簡文を紹介している。

幕末から明治の箱館に関係ある人物を調べてみると要めとなる経歴の部分を明らかにできる資料が少なく、ときに推論とせざることが少なくない。最も新島七五三太と交友を深めた福士屋卯之吉にしても英語をどのようにして覚え、何故外人居留地の英国商人であったアレクサンダー・ポップ・ポーターの商会に勤めるようになったのか明らかでない。同様に箱館の人で日本西洋画、写真術の先覚者である横山松三郎も自伝を書きながら安政から明治に西洋画と写真術をどのようにして箱館の外国人から技術を修得したかを明らかにしていない。現在我々が必要とする要めとなる部分、新島の脱国の真相もそうであるが、福士の英学を学んだ動機、さらに横山の西洋画と写真術を修得した経過は、それぞれの人物が最も苦労した時期で、それを記録に残すことを避けている。極端な言い方をすれば、秘訣の部分であるのかも知れない。新島七五三太の函館から脱出したことについてはJ・D・デイヴィス著が基本として訳されてきた。

明治二十四年の『新島襄先生之傳』同志社教授ゼ・デ・デビス著、村田勤・松浦政泰合訳、大阪福音社をはじめとして、新しいものでは一九七七年の『新島襄の生涯』J・D・デイヴィス著、北垣宗治訳、小学館がある。

北垣宗治訳から関係の部分を引用すると、「四月二十一日（旧歴）に新島は箱館についた。ここは当時の開港の一つで、イギリス、アメリカ、ロシアの領事館があった。しかしながら、若い新島を待っていたのは失望であった。

というのは英語を教えてくれる人を探し求めたけれども得られなかったからである。乏しい財布の中身はあまりにも早く消えて行った。…中略…さいわいニコライ司祭という日本でギリシャ正教の布教に成功していたロシアの神父に彼は出会ったからである。ニコライは喜んで彼を日本語の教師に傭った。彼はニコライの家に移り、仕事を始めた。…新島はそのうちに少数の目覚めた若い日本人と知り合いになった。その中に福士宇(卯)之吉という英国商館の書記がいて、英語をかなりうまくしゃべることが出来る人であった。この人こそが新島の人生のドラマにおける大事な幕で最も重要な役割をはたすことになったのである。」

一八六四年四月二十一日から六月十五日ベルリン号函館出帆まで、箱館滞在五十五日間は、青年新島七五三太二二歳の人生の出発準備であり、箱館出帆は新島にとって重大な決意の船出であった。

自ら逃亡といい、日本脱出や脱国といっているが、単に渡航と呼べない国情にあった。それは亡命とか密航者でなく将来の日本を考えての国禁を犯しての渡航であった。

箱館滞在中のことについて、新島襄は『函楯記行』や『航海日記』に書いているが、このことは井上勝也著『新島襄　人と思想』晃洋書房、一九九〇、で分析しているので、北垣宗治郎編『新島襄の世界　永眠百年の時点から』晃洋書房、一九九〇と共に参考としてその引用を「　」として述べることにする。

国禁を犯しての渡航にあたって、山之上神明社の沢辺数馬、ポーター商会の福士屋卯之吉、武田塾(諸術調所)の塾頭菅沼精一郎、ニコライ司祭の助けによって秘かに日本を脱出することができたが、新島襄ならびにJ・D・デイヴィスの著作とは別の視点で、当時の函館をみてみたい。

新島襄と福士成豊については『新島研究』第六三号、一九八三年に書き、北垣宗次編一九九〇年に収録されているが、ややそれと重複するかも知れない。新島襄やJ・D・デイヴィスの記述による函館の理解と一般にみる函館の歴史に少し違う点がみられる。それは、これからの新島研究にとって参考になるであろうし、時代背景を知っていただけるであろう。

新島が箱館に着いた元治元年旧暦の四月は、桜が終りつつじなどが咲き、雲と青空が明るく風も暖かなときで、六月までの間は気候的にもっともよい季節であった。安政二年の一八五五年は、下田に次ぐ開港で箱館奉行所の再設置となり、蝦夷警備を奥羽五藩に命じ、奉行所の移

転と新築による五稜郭と弁天台場の築造、箱館周辺の台場の整備と充実が課題であった。この年アメリカ、イギリス、フランス、ドイツの軍艦が入港したが、安政六年の一八五九年六月、箱館は下田に代った神奈川（横浜）、長崎と共に通商貿易港として開港した。その前年にロシア領事、司祭、医師、武官など十五人が着任し、安政六年の十月にホジソン領事夫妻が着任した。箱館奉行所は、運上役所を設けて外国船の出入港、外国人交易、居留外国人に関する税関に相当する業務を開き、ロシア、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツの五カ国に対して「外国人交易」を許可し、「商人共勝手ニ可レ致ニ商売一」と自由貿易原則の触書をしめした。元治元年の状況をみると五カ国に次いでオランダ、ポルトガル、スイスとも開港している。輸入品目は艦船、毛織物、更紗、鉄、薬品、砂糖、その他で、輸出品目は昆布、干鮑、生糸、スルメ、板、帆立貝、煎海鼠（ナマコ）などで、輸出入額は、安政六年から元治元年にいたると急激に増加している。

箱館開港後の外国船舶入港表を運上役所の資料からみると、文久三年の一八六三年はイギリス二十三、アメリカ二十、ロシア十八、プロシア四、オランダ二、フランス一である。艦船の内訳はイギリス軍艦二、商船二十一、アメリカ商船十六、鯨漁船四、ロシア軍艦十七、商船一で、その前年はアメリカ軍艦一、商船十七、鯨漁船十五、ロシア軍艦二十三、商船四、イギリス商船十四であった。

元治元年の一八六四年は、イギリス軍艦一、商船四十八の四十九隻、アメリカ鯨漁船七、商船十で十七隻、プロシヤ商船七で、この年は総数八十と慶応三年までの外国船入港船数が最も多い年であった。

箱館入港の船舶は輸出入額から一八六三年より多いことがわかる。これらの入港した艦船は、旧暦の六月頃から九月までが最も多かったようである。

箱館奉行所の運上役所は港湾のほぼ中央の海岸にあって、海産物商取引の問屋などがある地域に設けられた。外国人居留地である大町築出地は、二千坪の規模で一八六〇年に竣工して翌一八六一年に完成したが、これは運上役所の隣接地であった。これより東の内湾に一万坪余りの地蔵町築出地が完成するが、居留外国人も増え、在留官吏の申立てもあって、元治元年四月には埋立地を外国人に提供することになった。イギリス人のトーマス・W・ブラキストンが蒸気機関による製材所を設けたのも地蔵町新築島であった。

ポーター商会は、大町築出地の外人居留地の橋を渡ったすぐ西角にあって、中央の通路を進むと波戸場（波止場）がある。これは外国商人、外国人専用といえるもの

で、両側に五区画ずつ、十区画があってアメリカ人、イギリス人、ロシア人のゴシケビッチが借りていた。この波戸場は、新島七五三太を手引きした福士屋卯之吉が小舟でベルリン号に案内した所で、新島七五三太が脱出した六月は、例年になく外人居留地に外国人の往来が多く、英語の通訳をしながらポーター商会にいた卯之吉は多忙な日々を過していたと思われる。現在波戸場の位置には「新島襄渡航之碑」が建てられている。

箱館開港で最初に滞在を許された外国人は、アメリカのE・E・ライスでアメリカ国務長官の書簡を持参した。安政四年四月で、安政元年のペリー艦隊が入港以来の滞在で、ライスは文久元年に帰国し、翌万延元年に再び函館に戻り明治までいるが、英語、西洋植物など少なからず函館に影響を与えた。身分はコマーシャル・エージェントの名目であったが元治元年に「Consul」に任命されている。ロシアは安政五年に領事（六等官）I・A・ゴシケビッチ、書記官（十等官）V・A・オヴァンデル、医師（七等官）M・P・アルブレヒト、修道司祭フィラレット、海軍武官P・N・ナジモフ大尉その他で領事と医師は家族を同伴していた。ゴシケビッチはロシア外務省の官吏であり、領事という身分でロシア帝国の日本における代表として赴任したのである。文久元年には総領事に昇進している。この点アメリカとは大きな隔たりがあった。箱館ロシア病院の医療は亀田川河口の奉行所が建てた家屋ではじめられたが、文久元年に焼失し、翌年に領事館の東側の隣接地に新しくロシア病院が竣工した。黴毒と眼疾の治療はロシア人の医術に頼るほかなく、奉行所御雇医師と町医師の中から外国医学を研修する目的で奉行が研修を承認したのは深瀬洋春、永井玄栄、下山仙庵であった。文久三年五月にアルブレヒトが任期を終えて帰国すると元海軍々医のゼレンスキーが着任した。ロシア領事館付司祭としてニコライが着任したのは文久元年六月であった。彼はゴシケビッチと橘耕斎による『和魯通言比考』を読んで日本語を勉強してから着任していたので、日本語には通じていた。万延二年には司祭イワン・マホフによる『ロシヤのイロハ』というロシア語と日本語の入門書が箱館で出版されている。ロシアの植物学者マキシモビッチは万延元年から翌文久元年まで一年二カ月函館に滞在して、長之助を助手として植物採集を続けているが、日本人と外国人との接触は安政六年からみるとかなり緩慢になっていた。

ロシア領事に次いで着任したのが、イギリス領事ベンバートン・ホジソンで、安政六年にフランス領事を兼ねて夫妻で着任した。この年アレクサンダー・ポップ・ポ

ーターが英国デントン商会の支配人として来箱して独立するが、トーマス・ライト・ブラキストンは、文久元年に次いで文久三年に箱館にきて貿易と製材業のブラキストン・マル商会を営んでいた。

ロシア領事ゴシケビッチが着任したとき、箱館奉行所ではオランダ語、英語が通用していた。自由貿易港となった箱館の文書は英語で、安政六年になると老中から各開港場での通訳養成の達しが出された。箱館英語稽古所は万延元年に名村五八郎が教授として十二月に運上役所内に設けられ、文久元年には英学教授掛として手当が支給されていた。生徒は主に同心や足軽、在住の子弟であったが、弟子が教授見習となり通訳の階級ができて、箱館通弁御用はロシア語通訳にも適用された。

箱館奉行は蝦夷地警衛のため洋式船の必要から元高田屋造船所の頭領続豊治に、安政三年船大工頭領を命じた。安政元年に入港したペリー艦隊と次いで各国軍艦の箱館港入港に驚いていた続豊治と息子で福士屋に養子となった卯之吉はすぐに艦船の観察と設計に取組んだ。洋式艦船に接近して、ときに内部構造や部分名称、工具などを知るのに英語が必要であった。父親の豊治五十六歳、卯之吉十八歳のときである。奉行の命令で洋式船を完成させるのに卯之吉は独学で英語を勉強し、翌四年に船体堅ろうで、構造の精密なスクーネル型の洋式船を完成させた。これは和船の長所をもとり入れたもので全長二九米、五六屯の船は箱館丸と命名された。外国人の指導によらず日本人が初めて建造した洋式船であった。西欧文明の驚異をまのあたりにした卯之吉は、語学を身につけ、万延二年（文久元年）に件名別英和辞典を作成し、さらに英和辞典を作った。これは、外国人にとっての和英辞典でもあった。元治元年に新島七五三太と会ったとき、すでに商会の通訳として活躍し、多忙な日々を過していた。

新島七五三太が箱館についたとき、「英語を教えてくれる人を探し求めたけれど得られなかった」と失望しているが、名村五八郎の箱館英語稽古所があったことを耳にしなかったとは考えられない。「乏しい財布の中身はあまりにも早く消えて行った。」快風丸乗船の前に「金がなくなったときにはどうやって衣食の道をたてるべきかをも考えず、ひたすら運を神の御手に委ねて」真理を求める旅へと旅立っていたのであった。

ニコライ司祭に世話になり眼の治療のためロシア病院に通い、ニコライに心に秘めた目的を打ち明けたとき、計画に反対されて、警告に失望して、外国人居留地で友人を探し始めたとあるが、四月二十一日に箱館に着いて五月三日に菅沼精一郎に案内されてニコライの家に行っ

たとき、新島の懐中はすでに乏しかったと思われる。ロシア病院では無料で治療をし、入院もさせて食事も与えていた。その費用は後に箱館奉行所に請求することになるのだが、船宿讃岐屋にいるより入院治療となれば無料で生活できることになる。

箱館が自由貿易港になると、回船問屋が繁盛して外国船の食糧である野菜などは青森からも供給された。物価が高くなり、外国人はどうも奉行所の役人がリベートを取っているのでないかとも言っている。港街であるから当然船宿も値上りしていたことが考えられる。

景気が良く物価高となった箱館で新島が生活するには経済的援助が必要であっただろうし、滞在が不可能ならば脱国して海外で先進文化を学ぶしかなかったのだろう。

「私がそこ、外人居留地で見つけた最初の友人はイギリス人商人に雇われている日本人店員で、彼とは短時間会っただけだが、不思議に親切にしてくれた。私は彼が大変好きになり、彼の事務所にしばしば訪れることを許すように彼に頼んだ。彼は仕事が暇なときはいつでも歓迎するといってくれ、その上私に英語を教えてくれることにも同意した。そこで私は二、三度彼に会った後、私の長く胸に秘めていた計画を彼に打ち明けた。彼は大変喜び、心にとめておくことを約束してくれた。私は計画を遂行したい願望を強くもっていたので、町人の服装をよそおい、箱館の街に出るときは目立たないように努めた。私は当時武士の象徴とみなされていた長刀を身につけず、髪の毛をより飾り気のないものにした。彼は私の心の内を語ってから一週間もしないうちに、彼は祖国を離れる準備を即刻するようにと私に語った。アメリカの船長が中国まで私をつれていくことに同意したからである。…すばらしいチャンスを知らされたとき、私はどれほど喜んだことだろうか」。

新島七五三太の心中はいかばかりか知れない。

一元治元六月十二日午前二時米国スクー子ルベーリヱン号支那向テ函港出発之際

足下我国未開之旧習ヲ洗助セン事ヲ志望シ小生足下之深志ニ感謝シ乍恐秘ニ国制ヲ犯シ以テ該船ニ奉供シ足下ノ手握テ暫時本願之達シル迄離別ヲ乞シトキ足下ノ一首ニ

武士の思立（田）の山も美す　錦の衣モきされば　なと帰るべき

新島七五三太　手記

〝我国未開之旧習ヲ洗助セン事ヲ志望シ〟函館を出港、

福士の志に深く感謝し、秘かに国制を犯して船の便宜を与えられた新島の気持を手記にとどめたものである。

明治九年、福士は新島からの手紙と写真を受取って次のような書簡を送っている。

今般足下遂本意御帰朝ニ付御幸福ヲ奉祝シテ
…我国事ニ情神ヲ被尽給小事万理之米国ニ文学ヲ志シテ遠トセス　頗ル艱難辛苦ヲ忍其尽処之實功該国ニ耀シ大ニ欧州ニ渡テ探究スル処アリテ今帰朝シ以テ足下ノ志願ヲ全整シ則同志社開業ヲ以テ元始トシ尚一層時制之気運ニ随ヒ全国ニ盛進セン事ヲ喜望シ

明治九年六月九日　　福士成豊

新島襄様　　再拝

一八六六年（慶応二）二月二十三日、新島はアンドーヴァーから脱出を助けた福士に手紙を出している。これには、〝本当に今すぐにでも飛んで帰って会いたいものです。君の真の友である　新島七五三太〟とある。

君の真の友である新島、この意味に含まれている〝真の友〟とは、欧米の先進文化に共鳴した熱情が将来の日本にとって必要であると信じた決死の覚悟で結ばれた友情であった。それは二人だけの絆でもあった。

卯之吉は、ブラキストンと交際して測量、機械、天体測候、博物学を学び、一八六六年箱館奉行から御船大工棟梁見習を命じられ、石炭運送和洋折衷の船二隻を建造、一八六八（明治元）年箱館府外国方運上所出役通弁兼器械製造掛趨事席を命ぜられて名字帯刀を許され、名を成豊と改める。明治二年開拓少主典、次いで開拓権大主典となり、自宅に気候測量所を設け、ペトロパブロフクス、千島出張を命ぜられるなど、函館で自ら西欧文化を学んで多くの業績をのこした。

武士の新島七五三太と平民の福士卯之吉が幕末の開港箱館でめぐりあったとき、そこには身分階級はなく、強列なまでに動揺する旧習と欧米の先進文化、各国の艦船と往来する外国人、外国製品の荷揚げと蝦夷産物の積荷で活気づいている港街をまのあたりにした新島は将来の日本を考えたとき、自らを逃亡者と決めつけて欧米に渡航して学ぶしかないと決意していた。福士のように箱館で欧米の先進文化を学ぶことはできたであろうが、武士の決心はとどまることができなかった。共通の認識と理解の上で新島の気持を達成させえた福士がどれだけ新島に期待し、その身の無事を祈ったか知れない。その意味で新島七五三太と福士卯之吉は真の友であったばかりか、日本近代の先覚者となりえたのである。

一九五八（昭和三十三）年大学経済学部卒業　市立函館博物館学芸員

新島襄をめぐる人々

湯浅治郎と新島襄

原　誠

新島は、たぐいまれな性格を持っていた。それは出会った人に、彼のために喜んで生き方を変えさせるような「何か」である。有名・無名の人々が、彼と出会い、そして生き方を変え、それを悔いなかった。

ここではそのような一人として湯浅治郎と新島との関係について、限られた紙幅であるがその一面について述べる。新島がアメリカから帰国して以来、その生涯、そして新島召天後の初期同志社において、湯浅はあまり目立ちはしないかも知れないが、新島の最も忠実な弟子であり、協力者であり、支援者の一人であった。年令は新島より七歳若かった。

新島が一八七四年十一月にアメリカから帰国し、ただちに両親の住む上州・安中に向ったことはよく知られている。新島の上州滞在は一カ月であったが、彼をその真正な意味で迎えたのは、新島の家族を除けば医師であった千木良昌庵と味噌醤油屋「有田屋」の若き当主湯浅治郎であった。かつての犯罪人がアメリカの大学を卒業して新時代の英雄として故郷に錦を飾った時、多くの人々は物見高く、あるいはまた旧幕府側であった安中藩士たちは、新島をたよって官職を得るために集まってきた。しかしその郷里の人々に新時代の精神としてのキリスト教を説いた。そして一カ月後には、キリスト教、「天上独一真神」（『新島先生書簡集・続』）を学ぼうとするグループを生んだ。その中心が千木良であり湯浅であった。

新島が彼の職務に従って関西に移り、京都に同志社を創立したあと、安中でこの研究グループを支えたのは彼らであった。何ゆえに湯浅は新島をこのように迎えることができたのか。

湯浅は一八五〇年、有田屋の長男として生まれ、一五歳で当主となり、幕末期の開港場であった横浜に生糸を売りに行き、ここで西洋の新しい息吹きに触れ、若き開明的勧業思想の洗礼を福沢諭吉の書物によって受けた。彼の中には、封建時代と決別する新しい進歩的思想を求める「地ならし」ができていたのである。そして新島はそれを与えることができたのであった。この新島との出会いは湯浅に大きな飛躍を与え、新しい活動の場へと導いた。

湯浅らは京都にいる新島からキリスト教に関する書物を送ってもらい、キリスト教研究グループを支え、それが実を結んで一八七八年に安中教会の創立を見た。安中教会は、創立時においてすでに独立自給の教会として出発した。創立にいたるまでは新島の推薦によって海老名喜三郎を迎えていたが、これらの教会諸経費の多くは湯浅に拠っていた。

湯浅は、一八七八年、群馬県布達によって郡書記となり、翌年第一回の県会議員に当選。その翌年には他の議員と共同して「娼妓廃絶ノ請願」を提出し、それ以降続く群馬の廃娼運動の指導者となる。八一年には県民の意志を代表する県会議長となり、知事の公選を主張した。また自由民権運動では、(1)民権の拡大、(2)地租軽減、(3)自由気運の発達、をめざす上毛協和会の設立に参画し、学務委員として安中小学校の設立や碓水銀行の創立と頭取就任、蚕糸会社である国光社の設立などを行なった。さらに上野・高崎間の鉄道開設のために日本鉄道会社で

は、理事として株の集積にも力を尽した。

また第一回から衆議院選挙に立候補し当選して二期務め、国家予算がわかる数少ない政治家として認められ、将来の大蔵大臣との声もあったほどである。

他方キリスト教関係では、安中教会の信徒としてあるばかりでなく、一八七八年頃から東京にも住居を持ったことも要因であろうが、同年の第一回基督信徒大親睦会に出席して以来、小崎弘道、植村正久らキリスト教界指導者と親交を結び、東京YMCA創立(一八八〇年)、警醒社創立(一八八三年)に参画し、『六合雑誌』(一八八〇年)や植村正久の『真理一斑』(一八八四年)、小崎弘道の『政教新聞』(一八八六年)、徳富蘇峰の『将来之日本』(一八八六年)の出版に尽力した。日本組合教会では、一八八六年創立以来一〇年間、本部常置委員として会計の任を務めた。新島は大反対ではあったものの、組合教会と一致教会との合同問題では組合教会側の唯一の信徒委員として参加した。

一八八四年には、湯浅が一七歳の時に結婚した妻茂登を喪ったが、翌年には徳富蘇峰の姉初子と再婚した。

すでに一八七五年に創立されていた同志社とは、八六年頃から関係を持っていたが、八八年に新島より社員の就任依頼を受けて以降、多少の中断はあるものの、一九一八年まで三十年の間、社員・理事として関わった。就任直後には、新島、徳富と共に「同志社通則」の起草に関わった。この年は、同志社が「大学設立の旨意」を公表した年であり、同志社の発展が予想されていた頃である。

湯浅の活動の領域は、草深い安中から群馬県全域に、そして更に中央の東京へと拡大しながら、全国レベルの自由主義的政治家・実業家へと変貌していった。

この頃の湯浅への新島からの書簡が『新島襄全集・4』に収められている。あて先は「東京々橋日吉町廿番地　民友社」となっている。その内容は実務的なものに限られている。湯浅の東京での活動拠点は義弟である徳富蘇峰の民友社であったことがわかり、また新島との交流の仕方も実務的なものに限られていたことがわかる。

新島は一八八九年の末に上州前橋で再起不能の病を得て大磯に移り、年を越して一月二三日についに天に召される。新島の「同志社大学設立募金日誌」(『新島襄全集・5』)には、「到底回復ヲ期シ一ト運動ヲ為スノ見込モ立タサルヲ以テ、前橋、高崎ノ事ハ先ツ湯浅氏ニ托シオキ、断然ト意ヲ決シテ東京ニ帰ル事ニ定メ」とある。新島にとって湯浅が大きな頼みの綱であったことがよくわか

る。湯浅は新島危篤の報を受けて小崎らと大磯に見舞いはしたものの、新島の召天の時にはその場に居合わすことはできなかった。それは前年の大日本帝国憲法の発布とそれに伴う国会開設を間近にひかえ、民友社として『国民之友』を新聞となすべく準備をしており、「都下の人士を招待して其意見を求むる会を準備して居た」（『湯浅初子』）ので、湯浅自らは大磯に行かず、徳富を行かせたからである。

しかし、新島の死は、湯浅のそれ以後の生き方に重大な変更をもたらした。新島の死の翌年、湯浅は京都に住いを移し（最初は東梨之木神社の北、のち蛤御門の前）、さらにその翌一八九二年には、湯浅四三歳の時に政界を引退してしまったのである。

湯浅について書かれた最初のものは、湯浅没（一九三二年六月七日）後の三カ月後に息子三郎の編で刊行された『湯浅治郎』がある。この中には弟吉郎（半月）と柏木義円の「湯浅治郎伝」、小崎弘道、浮田和民、徳富蘇峰、山室軍平、安部磯雄、深井英五、海老名弾正、日野真澄らの追悼説教、追悼の辞などが収められている。それらの中で義弟徳富は湯浅の政界引退について、彼に「妥協の精神」がなかったからだと評し、「湯浅翁の同志社に行かれたと云ふ事は、私に取っては殆ど自分の女房を失った程の力を落した」と嘆かせるほどのものだった。

湯浅が京都に住いを移したのは、彼が四二歳の時、そしてふたたび東京に住いを移したのは一九一〇年、彼が六一歳の時であった。すでに述べたように、実業家として政治家として、壮年期の最も活力ある年令、また責任を負うことのできる年令、そして成熟した大人としての手腕を運用できる年令であった湯浅は、新島亡きあとの同志社を支えるため、その活力溢れる時代を同志社に傾注し、活動を絞り込んでいったのである。あるいは政治家として大成するには「妥協の精神」が欠除していることを自覚していたのか。しかしおそらくはそれはどこにあっても求められたことではなかったか。筆者は、湯浅のこの転身を、武田清子教授がその著書『人間観の相剋』の中で、「一つの挫折のように見えるかも知れない」と評したことに反対して、そうではなく、ここにこそ湯浅の新島との出会いによって与えられた「何か」に対して主体的決断としての応答があったと見て、新島亡きあとの同志社史の一側面と関わらせながら積極的に評価した論文を書いたことがある（「思想に生きた経営者―湯浅治郎」、『日本プロテスタント人物史　近代日本の文化形成』、ヨルダン社）。

本稿のテーマが「湯浅治郎と新島襄」という時、新島亡き後は関係もまたなくなるのだろうか。そうではなく、湯浅にとっては新島が天に召された後に、新島の志を継ぎ、新島が描いた志半ばの内に残された同志社を維持し発展させてゆくことが、新島の弟子、協力者、支援者として、言葉の深い意味で彼にとっての主体的選択であったように思えてならない。それは前述の武田清子教授が「湯浅治郎の生活とその歩みとを考えるとき、彼一人が特に目立った存在であるとか、一人で立派なこと、独自なことを行なったというよりも、常に仲間と共にそれをなしていることが一つの特色だといえるのではないか」と指摘されている通り、まさに新島と湯浅との間には、目には見えないが真に志を同じうする者としての歩みが、新島ののこした同志社を媒介としてなされたと見るべきであろう。

新島亡き後の同志社は、内外で大きな困難と遭遇していた。外には「教育ニ関スル勅語」が発布されたことによる天皇制国家主義体制の完成をめざす文部省行政との闘い、すなわち兵役免除の特典と上級学校への進学資格をめぐる問題であり、内にはアメリカボードとの間でなされた抽象的にはミッション・スクールかキリスト教に基づく人格教育かをめぐる問題、具体的には「同志社通則」の改正問題や財産問題であった。内外というものの、本質的には同志社の存立に関わる問題であり、国家との関係を除けば新島在世中より問題はありながら、新島の存在がこれを押し殺していたものが新島の死後にこれらの構造的問題が噴出してきたのである。

このような中で、湯浅は財務に明るい実務家として資産関係の明確化、事務関係の整備を行なった。同志社の所有する土地は、当時様々な人の名義を借りていたり、区画が入り組んでいたのを湯浅が整理したのである。一八九一年の「同志社報告」には、特に一項を起して湯浅に対して謝辞が述べられている。

同志社大学宗教部の『レゴー』（第一七―一九号）には、神学部の土肥昭夫教授が「湯浅治郎のこと」と題して執筆され、同志社大学人文科学研究所所蔵の湯浅の自筆文書を紹介されている。そこには湯浅の「憲法私案草稿」「同志社の経営・教育学に関する意見書」「朝鮮教化伝道運動論稿」などが紹介されている。これらを読んでみても自立した思想家としての湯浅を読み取ることはできても、新島との人間的交流や感情を表わすものはないし、その他の文献にも見い出すことはできない。しかし注目すべきは次の文章である。

前掲の『湯浅治郎』の中で、浮田和民は次のように述べた。「私は湯浅翁を思ふ度に必らず新島先生を思ひ起すのであります。（中略）湯浅翁は老いてはいたが生きた親の形見でありました。親とは誰か。即ち同志社の親です。（中略）然るに明治二十三年新島先生の死後直ちに政界を去り、万事を擲って京都へ転住されました。その動機に就ては一度も聞いたことはありませぬが、爾来今日に至るまでの翁の一生涯を概観しまするとと、翁は爾後一身を犠牲にして新島先生の霊に奉仕されたと申す外に、説明の方法はないと思ひます。」

湯浅にとっての新島との出会いは、若年期の開明的勧業思想の根本原理を明示するものとして新島の説くピューリタン的キリスト教を受容することであり、彼の職分において実業家として、政治家として、社会活動の支援者として、すでに述べた様々な分野においてパイオニア的な働きを「平信徒」として行なうことであった。しかし実は、地味ではありながら、人からは「挫折」と見られようとも、その全力を注いだのが新島亡き同志社の経営に資産管理に無給の会計主任として尽力したことであった。その同志社に対しては、『上毛教界月報』（三六二号）に九項にわたって、柏木義円が湯浅の意見として述べている。これらは今記す紙幅がないが、新島の同志社にかけた期待と理想を忠実にそして正統に継承していることが明白である。

新島を導き、生かし用いた神が、今度は新島を用いて湯浅を導き、生かし用いたのであった。

（新島学園女子短大助教授）

新島襄をめぐる人々

沢山保羅と新島襄

佐野安仁

沢山保羅と家族

明治期の福音宣教において、大きな功績を残した新島襄（一八四三―一八九〇）と沢山保羅（一八五二―一八八七）の生涯を対照するとき、それぞれの歩みに共通した特徴をみることができる。両者は共に幕末激動の波瀾のなかで生をうけ、その歴史の流れと共に少年期から青年期を送っている。やがて、時期的には前後するが両者は、意を決して渡米し、米国で学び、かつキリスト教に入信し、キリスト教による経世済民の思想、福音の教化策を胸中に秘めて帰国する。帰国後、新島も、また沢山も中央官界からの誘いを断ち、官途栄達の野心を捨て、野にあって、かつ共に持病と闘いつつ福音の宣教とキリスト教主義の教育事業に献身した。また草創期の組合教

会の形成に重要な役割を果した。

(一) 二人の交流に至るまで

沢山保羅は、一八五二（嘉永五）年に長州（山口県）の吉敷で誕生した。新島襄は一八四三年の誕生であるからすでに十歳であった。沢山保羅が時代の激動を直接に体験したのは一八六六（慶応二）年、十四歳のときであった。この年、沢山保羅は四境戦争（第二次長州征伐）に良城隊五十隊の鼓手として参戦し、芸州口にて幕府軍と相対した。恐らく挙藩一致の体制による参戦に、異常な緊張を感じたことであろう。このころ、新島襄は渡米しており、アンドーヴァーのフィリップス・アカデミーで学んでいた。

明治元年、十六歳のころ沢山保羅は、荻生徂来の学風を伝統とする郷校憲章館を去り、備前（広島県）三原の吉村駿に、さらに今治に渡り吉村の義父渡辺絢助に師事し陽明学を学んだ。沢山保羅が師事した吉村駿は維新当時修道館の教授であった。陽明学といえば「知行合一」を教条とする学問で、吉村駿は「良知は乾坤（けんこん）の正気にして孔孟と雖、私する能わず、謂んや程朱陸王おや」と説いている。「良知」とは「天地万有に存在する道」を意味する。この「良知」により正邪、善悪を判断し「是は是、非は非」として決断、実行することを沢山保羅は学んだようである。ちなみに、新島襄は十八歳のころオランダ語で物理学を学ぶ機会をえ、その学習に数学の必要性を痛感し、数学の学習に傾注していた。

一八七〇（明治三）年、沢山保羅は神戸にて英語の修学を開始した。当時、兵庫県外務局聴獄掛であった同郷の先輩内海忠勝をたよって、神戸に出た沢山保羅は、やがて、アメリカン・ボードの宣教師として来日していたD・C・グリーン（D. C. Greene）に師事して英語を学びつつ、グリーン宅での礼拝や聖書研究にも出席した。

新島襄が軍艦教授所で数学的思考をみがき、激動の時代に封建的秩序の拘束性から「自由」を求めた過程で聖書に出合い、そこに「天父」の世界を知り、脱国を決断し、米国で学んでいたころ、沢山保羅は時代のうねりのなかで幕府軍と戦い、新しい体制が確立しつつあったとき陽明学により「良知」を学び、さらに神戸にて英語を修得しつつキリスト教の世界にふれたのである。

さて、沢山保羅が渡米したのは一八七二（明治五）年であった。新島襄は、この年ニューヨークを出帆し、田中不二麿と共にヨーロッパ諸国の教育視察の旅に出た。沢山保羅は、D・C・グリーンの紹介でイリノイ州エバ

ンストンのS・グリーン宅（D・C・グリーンの兄）に寄寓して米国での生活をはじめた。彼は、まずノースウエスタン大学の予科に聴講生として入学し、専ら英語の学習に終始した。沢山保羅の学習は、しばしばの発熱と生活上の困窮により必ずしも十分とはいえなかった。修学の途中（一八七四年）、ワシントンの日本公使館に公費生もしくは公使館員に採用方を願い出たが断わられた。その年の秋、日本での伝道活動より一時帰米中のH・H・レビットの訪問を受け、日本に伝道者として帰国することを奨められた。この奨めにより沢山保羅はエバンストン第一組合教会のパッカード牧師に師事し、またシカゴのセミナリーで聖書研究に専念した。新島襄が比較的に恵まれた学習環境のなかで広汎な領域に関心をもって学習したのに対して、沢山保羅の修学は、聖書研究の一点に収斂された。

在来中、二人の接触はなかったようである。沢山保羅が私費留学生として生活上の困苦から日本公使館に援助を願い出たころ、新島襄は、アメリカン・ボードの宣教師に任命され、また按手礼をうけて一八七四（明治七）年に、教育事業の実現を胸に秘めて帰国する。沢山保羅は、日本公使館の援助もまた官途への志望も断わられ、当面の身のふり方と将来の生活を改めて考えざるをえなかった。H・H・レビットの来訪は、沢山保羅にとって大きな転機となった。その後、彼はパッカー牧師に感化され、「人間が神によって託された能力を、この世に展開し、貧しい人びとと共に富と力を分け、個人の責任を自覚し、神より託された各自の能力に応じて社会に貢献する」ことを学んだようである。とりわけ聖書研究の過程で、自らの使命を使徒パウロの伝道態度にみいだし、パウロの世界に傾倒した。それは系統的な神学研究というよりは、パウロの信仰を素直に学びとろうとするものであった。彼は、このとき幼名「馬之助」を「保羅（ポーロ）」と改名し、キリスト教による祖国の救済を決意して一八七六（明治九）年に帰国した。だが、彼の帰国の途は、新島襄とは異なり厳しかった。帰国の旅費はアルバイトをして工面しなければならなかった。幸いハモンド大佐や新島襄とも係わりのあったE・P・フリントの援助で帰国できた。

㈡　交流のはじまり

新島襄の帰国のとき、横浜港で彼を出迎えたのはD・C・グリーンであった。沢山保羅もグリーンに出迎えられた。新島襄が在米中沢山保羅の名を知る機会があった

とすれば、岩倉使節団の随員であった内海忠勝（沢山保羅の同郷の先輩）を通してであったと思われる。あるいはアメリカン・ボードのクラーク主事やグリーンらを介してであったかもしれない。二人が公式の場ではじめて出会ったのは、一八七七（明治十）年一月二十日であった。この日、大阪の浪花公会の設立式と共に初代牧師として就任した沢山保羅の按手礼式がおこなわれた。これは日本における最初の按手礼式であった、沢山保羅は、日本での最初の牧師ということになる。この按手礼式に新島襄は、ペテロの第一の手紙五章四節の「大牧者が現れる時には、しぼむことのない栄光の冠を受けるであろう」を引用し、牧師としての責任について説教している。

新島襄は、一八七五（明治八）年に極めて厳しい道程を経て京都に同志社英学校を開校していた。これは当初、大阪で設立しようと計画されていた。沢山保羅は、新島襄が断念した大阪に一八七八（明治十一）年、梅花女学校を設立した。両者は福音の宣教と教育事業を通して交流を深めていった。まず、一八七八年に二人は、岸和田の岡部長職の依頼に応じ、岸和田伝道に協力している。こうした協力において新島襄は主として伝道者養成に力を尽し、沢山保羅は、同志社から輩出された若き伝道者と共に教会の形成に主力をおいていた。

また、新島襄は梅花女学校に、沢山保羅は同志社英学校にと相互に赴き両校の教育に協力しあった。堀貞一によれば一八八三（明治十六）年沢山保羅は京都第二公会で、また同志社（六月二一日）で「聖霊をして憂へしむな」と題して説教し、「神は聖霊をもって吾らの心を開発誘導して下さる故に、聖霊を拒む時は遂に精神力を失う」と語り「満堂の罪人よ、生ける名ありて死せる信者よ、汝の聖霊を拒みて救はれると思うか」と熱烈に訴えた。同志社ではこの年から翌年（明治十七年）にかけて信仰覚醒運動が起こった。新島宅に宿泊した沢山保羅は、夜半、信徒一人ひとりのために、他教会のために、そうして同志社のためにも祈った。新島襄は隣室で沢山保羅の祈りに気づき、その祈りに粛然とせざるをえなかったと伝えられている。新島襄は、そのころ（明治十六年）「同志社大学校設立旨趣」を頒布し、大学設立の賛同と協力を訴えていた。沢山保羅は、その実現のためにも祈ったことであろう。沢山はこの年の十一月に、彰栄館の起工式にも出席し祈禱している。新島襄は、沢山保羅を「最善良なる羊牧」と感じ、その牧会活動に信頼を寄せていた。また沢山保羅は弟、雄之助を一八七九（明治十二）年に同志社に入学させ、弟の教育を新島襄に託していた。（雄之助は新島襄から洗礼を受け、卒業後、アーモスト大

学に留学、帰国して学習院の数学の教授となった)。両者は、こうして信頼を深めつつあったが、教会形成と学校運営の方法については見解を異にしていた。

(三) 自給論をめぐっての相違

一八七七(明治十)年六月、沢山保羅は新島襄、金森通倫らと伝道について意見を交換し、福音宣教とその体制の必要性を訴え、教化活動の組織づくりを提唱した。その提唱により翌年(明治十一年)、新島襄、沢山保羅、今村謙吉を委員とする「日本基督伝道会社」が設立された。この伝道会社の財政は、国内の教会からの献金で支えられ、アメリカン・ボードからの補助は全くなかった。まさに「自給」による伝道会社として発足した。しかし、同志社の卒業生で伝道活動に献身する者が多くなり、伝道会社はそれを支援する資金に苦慮した。こうした実情をみたアメリカン・ボードの宣教師団は、同志社卒業の伝道者をボードの資金により援助しようとした。新島襄は、宣教師団の意向を受けいれ、その資金を伝道会社に導入し、それにより伝道者を支えようとした。沢山保羅は、それに対し、あくまでも自給運営を主張した。その理由は、外国資金の援助を受ければ、結果的に日本人信徒の自主性を弱め、援助に頼って献金の意欲を失なわせ、自給精神の衰退を招くことになるということであった。つまりボードの資金の導入は、日本人による伝道体制を弱体化させるものであって、決してよい影響を与えないと主張したのである。このとき沢山保羅の見解は、時期尚早として、またボード資金の導入は、決して伝道会社の自主性をおかすものではないとする新島襄らの見解に押しきられた。沢山保羅の「自給論」は孤立した。しかし、自らに託された浪花教会と梅花女学校とを自給体制で運営した。それは、まさに「茨の道」であった。沢山保羅は、郷里吉敷の家産を処理しつづけて教会と学校の運営に当った。その上、彼は自分の病気の治療費も捻出しなければならなかった。病苦との闘いの中で沢山保羅は「小生は人生の種々なる境遇に接し、つぶさに辛酸をなめ申候、牧師となり、夫となり、父となり、しかしてさらに父と妹と子供と母を失い申し候。しかしながら、これらすべて生涯の喜憂は小生を駆ってますます『昨日も今日も永久に変わらざる』主に接近せし候次第……」と苦難と共に信仰を深めている。一八八三(明治十六)年には最愛の妻を肺結核で失ない「寂寥の念に堪へず転た凄寥の感禁ずべからず…」と胸中をもらしている。

こうした辛酸を沢山保羅は「天父の欲し給う間、我苦

しみを忍ばんとすなり」として生き、その厳しい生活の中で自給による牧会、学校運営の実践を「日本教会自給論」（明治十六年）として発表した。沢山保羅によれば「自給とは自ら入費を払うことにて、日本教会の事業即ち教会、伝道、学校の働きを維持する日本人信徒より出金して全く外国伝道社より金銭の助けを受けざるを言う」というものであった。彼の自給論は、まさに明治十年以来の自給による伝道実践の報告であった。

この年、新島襄は、同志社創設に至るまでの経緯を「同志社設立の始末」として発表している。これは新島襄の教育事業に関する実践の報告ともいえる。加えてこの年、新たな躍進をめざして「同志社大学校設立旨趣」を公表し、そのために広く協力を求めた。新島襄の大学設立構想は、キリスト教主義を根幹とするものであったが、「民資ヲ集合シ」（明治十四年の骨案）と、多く民間の有力者の協力を前提としていた。また「全国民の力を藉り」「人民の手に拠って設立する」（明治二十一年の「旨意」）という平民主義的な発想のものであった。キリスト教主義を教育に適用し、「独自一己の気象を発揮し、自治自立の人民を養成する」として新島襄は、大学設立の募金のために、政界財界を問わず、趣旨に共鳴する人たちの寄付を受けいれた。

この点に沢山保羅と新島襄との見解の相違があった。沢山保羅は、あくまでもキリスト者の自給精神による自治、自由を求めた。それは外国宗派からの拘束だけでなく、国家権力からの制約をもさけようとするもので、その主張は一貫していた。新島襄はアメリカ・ボードの宣教師として、その国際性を維持しつつ宣教師団の援助をうけ、同時に「全国民の力を藉り」自らの教育事業の理想に向けて「自立」「自由」「自治」の実現を図ろうとした。だが、そこにおける「自治自立」は、つねに諸勢力（宣教師団や国家権力）との調整、調和を必要とした。また、さまざまな「制約」の是正を要した。

植村正久は「新島からアンビションを刺戟されるが、沢山保羅は確信を与える」と語っている。明治の十年代を二人は、自給論をめぐって見解を異にしながら相互に協力して生きた。一八八七（明治二十）年沢山保羅の葬儀に参列した新島襄はその告別の辞で沢山保羅を「……氏ハ性敏ニシ学事凡テ進歩セリ、主一ノ気象アリ、又寛大ノ気象アリ、最善良ナル羊牧ニシテ遂ニ羊ノ為ニ生命ヲ棄ニシモノト云ベシ、常ニ苦状ヲ曰ハズ莞爾トシテアリシ…」と評し、また「師ハ信仰ノ泰斗ニシテ日本ノミューラルト称スルモ決シテ溢言ニアラジ」と自給の精神を称揚した。（ミューラーは明治二十年に同志社にて「目

的を達せんがために負債を起こさざること、名門大家に依頼して敢て其賛助を仰がず…」と伝道の基本精神を説いた）その新島襄も一八九〇（明治二三）年、大磯にて永眠。その後同志社の自由、自治主義は、「基督教主義を以って徳育の基本とする」という根軸をめぐって揺れ、国粋主義台頭の思潮の中で苦難の道を歩むことになる。

（大学文学部教授）

同志社の絵葉書シリーズ発行

茜色の雲に映えるクラーク記念館、淡雪の積もる良心碑、桜花欄満の啓明館（旧図書館）、大文字の送り火を背にする栄光館など、多くの校友・同窓が在学中馴れ親しんだ「今出川キャンパス」の四季折々の風物および「田辺キャンパス」の雄大な建物群を紺碧の空をバックに捕えたものおよび新島先生の肖像画遺墨などを、それぞれ六枚一組にして発行しました。

従来から同志社の絵葉書は写真・絵・版画などで発行されていますが主に記念品としてのものが多く、今回は趣きをかえて学校・建物などをまとめ、広く使われるものをと、校友秋山真邦・宇佐美宏両氏に撮影制作を依頼、その出来栄えは多くの方々から賞賛の言葉を受けています。

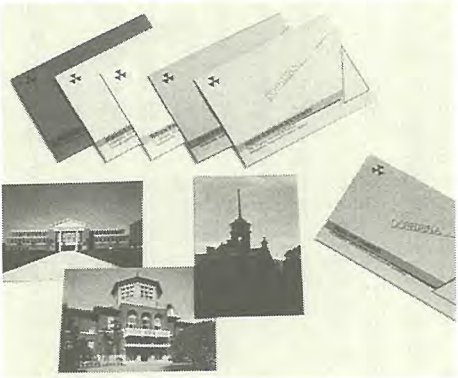
講入ご希望の方は、直接電話または文書でお申込みください。

なお代金および送料は現品送付の際、振込用紙を同封しますから後日ご送金ください。

〈内　容〉

◎重要建築物
◎新島襄の面影
◎大学今出川校地
◎大学田辺校地
◎女子大学今出川校地
◎女子大学田辺校地

定価各組とも
六枚一組二百五十円
（送料七十二円）



発行所　同志社収益事業課
電話　（〇七五）―二五一―三〇三七・八

新島襄をめぐる人々

津田仙と新島襄

高道　基

徳富蘇峰の「自伝」[1]によると、当時有名な新島襄の自鞭事件を惹起したストライキの首謀者であった彼は同志社を中途退学、新聞記者として自立しようと上京、初めから福地源一郎（桜痴）を社主とする「日報社」に赴き、福地に面会しようとするが果さず、遂に思案に余って津田仙に仲介を依頼しようと訪れる時の一文がある。

「予は百計尽きて、新島先生の友人であり、且つ又予の父（注、一敬）の知人である津田仙氏を、麻布三ノ橋なる学農社に訪うた。仙氏は顔に痘痕があり、挙動も如何にも真率と言わんか、軽易と言わんか、演説などをして、面白き所に至れば、聴衆よりも真っ先きに当人が笑い出すという程の人にて、極わめて毒の少き人

の様であった。」

徳富は結局津田仙より記者としての独立独歩をすすめられ、福地との面会については態よく断られて、「此の上頼み込むという事も面白からず」とて引き下ってしまうのだが、右の引用文は津田仙の風貌と挙措を余すところなくつたえて興味深い。福地と津田、さらに津田と新島との間にはこの時期どのような交友の糸が結ばれていたのであろうか。

昨年一月公刊された井上勝也氏の「新島襄―人と思想」には、津田仙の回想文[2]が援用されているが、それによれば一八五七（安政四）年以降、蕃書調所外国奉行所に出仕していた津田仙の言葉がこの間の事情を説明しているのでそのまま再録することを許されたい。

「余が若年の頃は耶蘇教（注、キリスト教）と言へば一般に悪しざまに罵るものゝみありしが、友人に杉田廉卿なる人あり。（中略）当時廉卿は翻訳方にて福地源一郎氏及び余などと務向の同じかりしまゝ、至って親しかりき。廉卿は英書と蘭書を解しゝが、元来宗教心深き人とて、解剖学など究めゆくに従い、遂に神を認め、而して之を奉ずるには、基督教ならざる可らずと信ずるに至りぬ。新島襄氏即ちそのころの七五三太君に斯教をすゝめしもこの廉卿なり。かくて廉卿は漢籍に通ずる吉田賢甫らと共に、英訳、漢訳の教書を調べ、まことに神こそ天地の主宰なれと主張しぬ。

新島氏とは渡米以前からの知合いで、氏が渡米してから親御へ手紙を送るにも又親御から米国に手紙を送るにも、皆老生の手を経たものである。氏は始め吉田賢甫、杉田廉卿と共に聖書を研究した。始めは蘭文の聖書を読んで居ったが、何分解しにくいと見え、後には吉田氏の漢文に長けたるを幸い、漢訳の聖書に就て学んだやうであった。」

幕末期、新時代を望むひそやかな胎動を窺い知ることができる津田仙の回顧文の併記が右の引用文であるが、ここには彼と脱国前の新島との間に年令の差を超えた黙契が結ばれていたことが知られる。維新後、同文中の福地源一郎は操觚界に入り、「太政官記事印行御用」の看板をかかげて「日日新聞」を発行して斯界の重鎮をなしていた。蘇峰にとっては若き日の夢を托すに相応しい人物であったに違いない。

一方津田仙である。津田仙は一八三七（天保八）年の七月、現千葉県佐倉藩百二十石を領する小島家四男として出生した。幼少年時代は武芸に熱中したが八歳で藩校に学び和漢の学を学んだ。一八五一年（嘉永三）年三月元服したが、やがてペリーの来航（一八五三年）を迎え、

世情騒然とする中で藩命により江戸海岸防衛の陣に加わり、ペリー艦隊の偉容に驚き海外事情を学ぶ必要性を痛感、洋学を志すに至った。蘭学修業のために江戸に出向するうちに英学に心を傾け、英文法の研究に入っている。一八五九（安政六）年、仙は横浜へ出て訳官であった福地源一郎（前出）方に寄寓しさらに英学研鑽に没頭するうち、その熱心が認められて一八五六年幕府が設置した「外国奉行」の通記に採用され、これが世に出る第一歩となった。一八六一（文久元）年、幕臣津田大太郎の婿養子となってここで始めて津田仙を名乗ることとなる。二十五歳の時である。一八六七（慶応三）年一月、仙は幕府の勘定吟味役小野友五郎に随行し、尺振八、福沢諭吉と共に渡米、まだ斬髪脱刀令（一八七一年）の出る前に斬髪、家族の一同に色を失なわしめたという。この間、幕府翻訳官時代、まだ七五三太を名乗っていたころの新島襄との邂逅があったことは前記引用文の伝える通りであろう。帰国に当ってヘンリー・ハッホン Dr. Henry Hartshorne の医学書を持ち帰り、この本は桑田衡平によって訳されて西洋医学の普及に貢献したことは日本医学史の領域に属することであろうが、これが機縁となってヘンリー・ハッホンの来日を誘い、その娘アナ・ハッホンと仙の娘、梅子（津田塾創立者）の間に親交が結ばれるのは明治と改元された以降の興味をそそるエピソードとなる。

維新を迎えた帰朝後の仙は、築地の「ホテル館」に勤めることとなるが、ここは外国人旅客のために設置された唯一の洋風旅館で貿易所を兼ね、文明開化時代の幕開けのシンボルであった。ここで仙は、外国人のテーブルに供すべき新鮮な野菜がないことを感じ、彼は国内での西洋野菜の栽培を着想し、麻布本村町に広大な土地を購入、ここに米国からとり寄せた野菜種をまきつけた。アスパラガス・りんご・オランダいちごなど日本初の開拓事業である。こうした着想の卓越さの故か、彼は一八七一（明治四）年一月、北海道開拓使の嘱託となった。北海道開拓次官としての黒田清隆との交友が始るのもそれ故である。又、米国から開拓顧問として招いた農務局長ケプロン General Horace Capron の通訳をつとめたことは、娘梅子が日本最初の女子留学生として選抜される機縁となった。[3]

一八七四（明治七）年、仙はウィーンから持ち帰った記録をもとに「農業三事」を出版、江湖の農事研究家に大きな刺戟を与えた。この間在米中の梅子は受洗（一八七三・七）、その影響も手伝ってか仙とその妻初子は共に求道、一八七五（明治八）年一月、メソジスト教会宣教

師、ジュリアス・ソーパーの手によって受洗、キリスト教信徒となった。あるいは幕官時代ひそかに研究した聖書と、その後の欧米事情視察の結実といえるかも知れない。彼はこの年七月、同志と相はからい、前所麻布本村町に農学校を創立した。これがキリスト教の色彩の濃厚な「学農社」である。ちなみに女学雑誌を主宰し、明治女学校を興した巌本善治はこの学校の卒業生である。

津田仙が「学農社」を興すに先き立ち、すでに新島襄は脱国後十年の研鑽をつんで帰国（一八七四年十一月）、間もなく「同志社」を創立（一八七五年十一月）するのだが、津田の「学農社」はこれに先き立って建てられている。共に繁忙を極めた創立者の二人が親しく語らい合う暇はなかったであろう。しかし津田は余程新島に信を置いていたものと見え、その長子元親を同志社に送っている。（この元親はストライキ事件ののち、徳富らと共に退学しようとするが、新島は仙氏より托されているから、といって引きとめている。[4]）

新島襄も又津田仙の厚情に酬いるためか、同志社第一回卒業生の一人、岡田松生を学農社教員として送っているし、又のち東京大学で倫理学を講ずるに至る中島力造も又、学農社教授としてその経営に参画していることが他の記録で確められる。[5]

「新島襄が同志社を中心に関西一円にキリスト教伝道に邁進している間、津田仙はメソジスト教会初の信徒として学農社を中心に重きをなし、奥野昌綱らの禁酒運動に参加したほか一八七八（明治十一）年七月、全国プロテスタント教徒大親睦会が築地の新栄町教会で開かれた折、選ばれて大会議長となったほか、さらに一八八〇（明治十三）年、当時の少壮気鋭の信徒、小崎弘道、植村正久らと共に「明六雑誌」（注、津田仙もその同人の一人であったが）のあとを継いで、一般の知識人層に対して指導的役割を果した雑誌を発行。これに「六合雑誌」と名付けたのは津田仙であったという。[6]

キリスト教会最長老の年令（新島襄の約六年年長）にあった津田が、自然若きキリスト教指導者の中に重きを加えていた情況が目に浮かぶが、新島も津田には自然に一歩をゆずっていたものと見え、その日誌、又出遊記にはしば〳〵津田の名前が一種の敬意に近い感情をもって散見される。

一、二の例を辿る。

一八八二（明治十五）年九月七日

小崎弘道氏教会、粟津教会に合併ス。此日ノ式ハ午后二時ヨリ初ム、津田仙、植村（正久）ワデル氏ノ祝詞アリ、予ノ勧アリ。五時半テ式ヲ終フ

右の記事には注解がいるであろう。

熊本バンドの指導的立場の一人小崎弘道はこれより先東京にあり、新肴町教会を興したが集会所に悩み、粟津高明宅で誕生した日本教会と合併し、「東京第一教会」という名称の下に粟津宅を集会所としようとするもので、引用文中、新島が粟津教会と称しているのはこのことである。合併式は正確には一八八二年九月二七日午后三時、粟津の日本教会において行われ、一同で讃美歌を唱和したのち、小崎が祈禱、讃美歌をはさんで聖書朗読、長田時行が合併の趣意と信仰箇条を朗読、伊勢（横井）時雄の祈禱があってのち、津田仙、植村正久、H・ワデルが祝辞を述べた。讃美歌ののち、新島襄が教会への奨めをなし、奥野正綱、小崎弘道両名の司式で聖餐式が守られ、小崎の祝禱で終わっている。のちの霊南坂教会への発展を卜する重要な会合であった。(7) 次ぎの日

同八日之夕

津田仙ノ招キ〔二〕応シ、伊勢夫婦等両人芝ノ紅葉館ニテ懇切ノ馳走ヲ受ク

九日

津田氏ト共ニ勝安房（注、海舟）先生ヲ訪フ。

と新島日誌はつづいている。

思うに津田は旧幕藩時代の地位を利して新島をねぎらい、諸方に紹介の労をとることに喜悦を感じていたものとみえる。他にも重要な会見又は書状があるが、詳しくは新島日誌に徴されたい。

津田仙は学農社のほかに第二の事業として「農業雑誌」の発行を企て、津田縄と称される花粉媒助法を全国に普及させているが、一方日曜毎にフルベッキ、ソーパーなどを招いて学生たちにキリスト教講話を聞かせて一時四大私立学校の一つとかぞえられるまでに学農社を育てたが、輕妙酒脱といわれた彼に経営の才が乏しかったのか、一八八四（明治一七）年、学農社は廃校、あとは「農業雑誌」と「農園」の仕事のみ残されるに至ったのは惜しむべきであろう。

仙は一八九七（明治三〇）年以降、事業の全てを次男次郎にゆずり、鎌倉に引退した。引退した後も禁酒・禁煙運動や孤児施設の世話などの公共事業に尽力した一九〇八（明治四十一）年四月、品川発の列車が横須賀に向う車中で死去した。彼は三月末上京、芝高輪の同志社卒業生上野栄三郎方に滞在、帰宅にあたって農園のあとの本宅から十本の月桂樹をとりよせ、うち一本を手づから上野邸に植え、残りを手荷物として汽車にのせ、鎌倉の自邸と教会に植えるために帰宅途上であったという。

津田仙は独立独歩、つねに創意に溢れて官職への道を自ら断ち、明治プロテスタンチズムの展開の中に一ときわ生彩を放つ光芒であり乍ら、その私行の乱れのために梅子よりはうとまれ、日本プロテスタント人物史の中では余り照明があてられなかった。この点から言えば、仙を新島の「親友」と記すことにはためらいが残る。しかし彼の異様なほどのエネルギッシュな自由精神のあり様が果した明治社会への貢献は、今後の研究を待つほかはないであろう。

注

(1)「蘇峰自伝」、昭和一〇年、中央公論社

(2)「護教」三四四号、及び六九七号

(3) このあたりの記述で参考にした文献を挙げると、山崎孝子「津田梅子」一九八八年六・一、吉川弘文館、磯崎嘉治篇「巌本善治」、一九七四年一〇、共栄社出版、鈴木二三雄「巌本善治と津田仙」、大庭みな子、「津田梅子」一九九〇、朝日新聞社など

(4)「蘇峰自伝」

(5)「安中教会録事」中無牧時代の安中教会には明治十一年十二月、乞われて学農社より中島力造が足をとどめたとある。代りに上野栄三郎が学農社に勤めたもの。

(6)「霊南坂教会一〇〇年」史。一九八〇年54ページ以下

新島学園女子短期大学学長

新島襄の掛軸の影本を頒布

この影本は、新島襄が元治元年、函館からの脱国に成功した後、航海日記に書きとめられた漢詩および明治二二年秋から二三年春にかけて、その心情を吐露された詩歌の遺墨の中から選んだものである。

◎掛　軸（影本）　一軸　八、〇〇〇円（送料三六〇円）

(H)「男子決志馳千里　自嘗苦辛豈思家
　却笑春風吹雨夜　枕頭尚夢故園花」
　慶応元年三月ワイルド・ロウヴァー号船上で作られた詩を明治一六年正月改めて浄書された。

(I)「不止月下併能越　跋渉八州是我分
　壮図却促男児涙　滴々灑為縷々文」
　明治二二年一二月新潟伝道に従事していた卒業生広津友信におくられた詩。

(J)「いしかねも透れかしとて一筋に
　　射る矢にこむる大丈夫の意地」
　明治二三年一月五日「送歳の詩」と同様大磯百足屋で詠まれた和歌。

◎　購入ご希望の方は左記までお申し込みください。

同志社収益事業課

京都市上京区今出川通烏丸東入
電話（〇七五）二五一―三〇三七・八

新島襄をめぐる人々

富田鉄之助と新島襄

――自己の所信に忠実に生きた二人――

杉江雅彦

『新島襄全集』書簡編の中から、新島襄が富田鉄之助にあてた手紙を探したところ、二通が集録されていた。いずれも明治十六（一八八三）年に書かれたもので、一通は五月十七日付、また他の一通は六月十一日付となっている。明治十六年という年は新島にとって、いよいよ同志社大学の設立という年来の夢を実現に移すべく、大いなる決意と情熱をもって諸困難にあたっていた時期である。

五月十七日付の富田宛の手紙の内容は、およそつぎのようなものであった。

「昨日は、わざわざお会い頂き、ご丁寧な応対をして下さって有難うございました。そのときにお話した大学設

立旨趣書をお送り致します。しかし、ほとんど出てしまい、わずかに数部しか残っていませんので、とりあえず二部差しあげます。いずれ四、五日中に入手しますので、到着次第またいくらかお送り致しましょう」

この中で旨趣書とあるのは、もちろん『同志社大学校設立旨趣』のことである。新島は同年四月に、この『旨趣』を全十三ページの冊子に印刷し、五月には新島自身がこれを携えて上京、有力者と会って大学設立について説明し、協力を求めている。富田と会ったのも、その目的からであった。

これだけなら、当時の富田は日本銀行副総裁の地位にあったから、有力者のひとりとして、新島が大学設立の協力を求めて会いに行ったとしても、決して不思議ではない。しかし、同年六月十一日付の新島の富田宛書簡をみると、新島と富田の関係は決して通り一遍のものではなく、むしろ富田が新島の大学設立に相当肩入れしている様子が想像できるのである。同書簡の内容はつぎのようなものである。

「お手紙拝見しました。自分が上京中に度々お会い下さっただけでなく、法学部設置につきましてもいろいろとお考え下さり、感謝に堪えません。また外山脩造氏に会う件につきましても、わざわざご連絡頂き有難う存じます。貴方のおっしゃる通り、本月末か来月はじめには是非とも下阪し、同氏にお会いしたうえで、募集の方法についてご相談致します」

新島と富田の関係をさらに決定的なものにしたのは、実は「仙台東華学校」の設立であった。東華学校というのは、新島が同志社大学の設立と並行してあたためていた、仙台にキリスト教主義の学校を創設するという構想が実り、明治十九年に開校をみた英学校のことである。不幸にして東華学校は、六年後の明治二十五年には廃校となったが、この英学校の創設を新島と協力して実現させた実力者が富田である。

後でややくわしく、富田の経歴について述べることになるが、富田は仙台藩出身である。彼の故郷である仙台が廃藩置県や地租改正などの変革によって疲弊し、若者達も将来の希望を見失っているのを心配した富田は、旧仙台藩士らと協力し、明治十四年に「造士義会」なる機関を東京に設立した。それを中心に、仙台出身の学生達に学資を貸与し、彼等に勉学を激励したのである。

このように、後輩の面倒をみるために物心両面の苦労を惜しまない義侠心を持つ富田が、仙台に英学校を創立しようと願う新島と結びついたのは当然のことであった。明治十八年十二月、募金のための欧米旅行から帰国

した新島は、早速その足で富田を訪れ、仙台に学校を建てたいので協力してほしいという相談を持ちかけた。

このときはじめて、新島の構想を聞かされた富田であったが、その後はむしろ新島を積極的に励まし、当時の森文部大臣や、後に東華学校最大の支持者のひとりとなる仙台市長松平正直を説き伏せただけでなく、資金面でも多大の協力をするなど、東華学校設立のために全力を尽したのである。同志社関係者に、「もし新島に、富田の協力がなかったならば、仙台東華学校の創立はなかった」とまで評価させた理由が、ここにある。

富田がこれほどにまで新島への協力を惜しまなかったのは、彼が新島の誠実さ、教育にかける情熱、行政能力などを高く買っていたからであるにちがいない。それでは、富田が新島といつ、どのような形で知り合ったのであろうか。

『新島襄全集』5（日記・紀行編）によれば、明治十一年三月二十三日の分に、「久濶ニシテ氏ト談シ、此度ノ事件ヲ託セリ」という文章がみえる。「此度ノ事件」とあるのは、すでにこのとき開校をみていた同志社英学校に雇い入れた外国人宣教師に対して、政府から京都寄留の許可がなかなか下りなかったので、新島が富田に寄留免許の周旋を依頼した件を指している。

しかし、この文章の中で着目したいのは、むしろ「久濶ニシテ」という部分である。つまり新島は、久し振りに富田に会ったことになる。とすれば、それ以前にどこで、いつ富田と出会ったのか。

さきに、富田は仙台藩出身であると書いたが、彼は藩命により江戸に二度留学し、そこで海軍奉行勝海舟に従って砲術と蘭学を学ぶ機会を得ることができた。その関係で富田は、勝の推薦によりアメリカに留学し、今度は主として経済学を学んだ。維新により一度帰国したが、明治五年にはニューヨーク副領事として、再度渡米している。

この明治五年という年は、岩倉具視を全権大使とする大型の米欧使節団がアメリカを訪問した年にあたる。富田はワシントンで岩倉使節団を迎え、アメリカ政府との折衝の任にあたったのである。一方の新島はといえば、ちょうどその頃、アーモスト大学を卒業し、さらにアンドーヴァー神学校へとすすんでいた。そして新島は、ワシントン入りした岩倉使節団に随行していた文部理事官田中不二麿の通訳を委嘱され、田中に従って各地の大学や高等学校、美術館、博物館、新聞社、工場などを見学してまわっている。

岩倉使節団は、明治五年一月二十一日にワシントンに入り、同年七月三日にボストン港からヨーロッパに向けて出発しているが、この間、北米各地を旅行している。この使節団に対する評価としては、「条約改正に向けての対米交渉に失敗した大型観光団にすぎない」という酷評もあるが、滞米期間中に彼等が、西洋の文物をどん欲に吸収しようと努力したことは事実であり、この間に、新島と富田とが何回かの出会いを重ね、議論を戦かわせる機会があったであろうことは、これは想像の域を出ないが、可能性があったものと思われる。

新島がアーモスト大学に入学したのが慶応三（一八六七）年であるが、奇しくも同じ年に、富田もアメリカに渡っている。新島はそのままずっとニューイングランドで学び続け、富田はいったん帰国したが、明治五年に再び外交官として渡米したこと、すでに述べた通りである。

このように似通った経歴の二人であり、また目指す方向こそちがえ、新島と富田も、ともに清廉潔白、自己の所信にまことに忠実に生きたという点に、共通点が見出される。短かい期間ではあったであろうが、アメリカでの出会いにおいて、お互いに深く心が触れ合う契機が生れたとしても、それは決して偶然ではなかった。

❖

富田鉄之助は、外交官としてニューヨーク副領事・上海総領事・英国公使館一等書記官を歴任して帰国した後大蔵省に転じ、大蔵権大書記官を経て大蔵大書記官に任じられ、日本銀行創設事務を担当した。明治十五年十月、日本銀行の開設四日まえに初代副総裁に任命され、初代総裁吉原重俊の死去により明治二十一年二月に二代目の日本銀行総裁に就任した。新島が『同志社大学校設立旨趣』を携えて富田を訪れ、資金募集の協力を要請したのは、富田が日銀副総裁に任ぜられた直後の時期にあたる。

富田は、横浜正金銀行問題で時の大蔵大臣松方正義と真向から意見が対立し、在職わずか一年半で総裁の職を辞した。しかし富田は、その後も多彩な活動を行い、長寿を保って大正五年、八十二歳で没するまでに、貴族院議員や東京府知事をつとめ、その後、富士紡績、横浜火災保険を創立、あるいは日本鉄道や日本勧業銀行の創設にも力を尽すなど、政・官・財界の広い領域において、先駆者的な役割を演じている。

『歴代日本銀行総裁論』や『日本銀行史』などの著者で、元日本銀行理事であった吉野俊彦氏によれば、富田は「歴代の日本銀行総裁の中でもっとも出色の人物」であるという高い評価が下されている。吉野氏はその理由として、つぎの三点をあげているので、ここで紹介しておきたい。

第一点は、明治のはじめは薩長出身でなければ、政府や準政府機関の要職にはつけなかった時代であったにもかかわらず、仙台藩といういわば「朝敵」出身者のハンデを持つ富田が、日本銀行総裁にまでなれたという点である。これは、富田が維新まえから外国に留学し、しかも経済学の知識を身につけていたことによる。

第二点は、富田がまことに清廉潔白な性格で、自己の所信を貫くのに忠実であったことである。日本銀行総裁就任後まもなく起こった横浜正金銀行の問題で、松方蔵相と意見の衝突を来し、在職わずか一年半で総裁のポストを辞した出所進退の処し方は、なによりもその現れである。

横浜正金銀行問題というのは、かんたんにいえば、日本銀行の創立に先立って、外国為替専門金融機関として創設されていた横浜正金銀行への日本銀行の資金供給に関して、当時の大蔵大臣松方正義と日本銀行総裁に就任したばかりの富田との間で意見を異にし、遂には富田がその職を辞すに至った事件である。松方蔵相の考え方は、①中央銀行は正貨吸収の責任があるが、荷為替等を直接に扱かうべきではない、②荷為替等の業務は経験と実績のある横浜正金銀行にまかせるべきである、③外国為替業務には低利資金が必要であり、日本銀行は横浜正金銀行にその資金を供給すべきである、というものであった。

これに対して富田は、松方の意見に真向から反対し、松方から「自分の意見に優る考えがあれば示せ」といわれたのを受けて、明治二十二年七月に、「奉答卑見」と「為替方法案」とを提出した。その内容についてはここでは省略するが、要は松方が日本銀行に求めるような、為替金融面で日本銀行が横浜正金銀行に優先的かつ固定的に資金を供給するといった優遇措置は、日本銀行としては断じてとるべきではないという、金融政策の原点を明確に示したものということができる。

松方が再三、富田に対して説得をしたにもかかわらず、富田は臆するところなく自己の所信を展開して、最後まで松方に譲らず、そのため結局は、松方によって日本銀行総裁の職を罷免された。

第三に富田が日本銀行総裁になってはじめて、日本銀行が大蔵省から独立していく道が開けた点をあげておかなければなるまい。横浜正金銀行問題で、松方蔵相が富田を罷免したのは、日本銀行は政府がつくったものであり、日銀は大蔵省の命令には絶対に服従すべきであるという考え方が強かったためである。結局、富田は職を辞さなければならなくなったけれども、富田が放った一本の鋭い矢は、中央銀行の自主性や総裁のあり方について、

後世にその範を示す指針となったのである。

富田のこうした性格は、日本銀行を辞した後にも遺憾なく発揮されていて興味深い。富田は、明治二十四年には東京府知事に任命された。彼と同郷の仙台出身の人びとは、富田の知事就任を祝って帝国ホテルで盛大な宴会を催したが、その席で最年長者の増田繁幸が立って、「富田氏は清廉潔白をもって身を処す人であるが、東京府知事にもなったのだから、これからは一身の進退を軽々しく考えてもらっては困る」と述べた。

これに答えて富田は、「予は至誠を以て進み至誠を以て退くの外他あるを知らず。故に富田鉄之助は何時に其の進退を決せざるべからざるや、其は予め知るべからざるものあり」と、ここでも自らの所信に忠実に生きるということを、くりかえし主張しているのである。これを裏付けるかのように、翌々年の明治二十六年には、政府と意見が合わず、知事の職を退いてしまった。

そうかといって富田が、頑固一徹の堅物であったわけではなく、非常に情誼に厚い人であったことも、ここで付け加えておかなければなるまい。たとえば富田が師として仕えた勝海舟の門下生を中心に、「洗足会」が度々催されたというが、その主唱者が富田であった。また、仙台出身の若者達を援助するため、「造士義会」がつくられたことはすでに述べたが、そこでも富田は中心的存在であった。

このような富田であればこそ、新島の積年の夢を実現させるべく、積極的に同志社大学の設立や仙台東華学校の創設に力を尽したのであろう。新島にとって富田は、またとなき協力者であり、理解者であった。

（大学商学部教授）

〔参考文献〕
新島襄全集3（書簡編Ⅰ）
新島襄全集5（日記・紀行編）
同志社百年史（通史編一）
同志社百年史（資料編）
日本銀行百年史（第一巻）
吉野俊彦「日本銀行史」（昭51・春秋社）
〃　「歴代日本銀行総裁論」（昭32・ダイヤモンド社）
〃　「忘れられた元日銀総裁―富田鉄之助伝―」（昭49・東洋経済新報社）

新島襄をめぐる人々

押川方義と新島襄

――出会いと仙台伝道とをめぐって――

本井康博

日本基督教徒大親睦会

新島襄が押川方義（一八五〇―一九二八）と初めて邂逅したのはいつのことか。第三回日本基督教徒大親睦会（以後、大会）の折と考えられる。

大会は一八八三年五月八日より五日間の日程で新栄教会（東京）で開催された。全国各地の教会が教派をこえて代表者たちを百余名以上も会場に送りこんだ。新島は京都、押川は仙台、そして内村鑑三も札幌から駈けつけた。

大会では押川の積極的な発言が目についた。初日の津

田仙による歓迎演説に対して地方の代議員を代表して答辞をのべたのも彼であった（『七一雑報』一八八三年五月一一日）。

この年、三月頃から京浜地方の教界ではリバイバル（信仰復興）の熱風が吹き荒れていた。それに煽られたことも手伝って、大会は「我国未曽有の盛大なる会合」となった（小崎弘道『七十年の回顧』七一―七二頁、一九二七年、警醒社）。

その結果、予定のプログラムを消化したあとも参加者たちは、余勢を駆って一四日から一九日まで教会や劇場にくり出して連日、大説教会を展開するほどであった。もちろん押川はその中心人物の一人であった。

彼は一〇日の午後、井生村楼（浅草）で「一致の説」を講演したのを皮切りに一六日（横浜海岸教会）――演題は「基督教に適するものを教ふ」（『東北学院百年史』一三〇頁、一九八九年、同学院）――と一八日（東京・久松座、「神の存在」）にも登壇して、熱弁を振るった（『七一雑報』一八八三年五月二五日）。

ちなみに、内村は九日（予定では一〇日）の演説会で新島の「伝道論」の前に「空ノ鳥ト野ノ百合花」を披露した（同前一八八三年五月一一日、一八日）。これは中央における彼のデビューに相当する。この時の演説筆記が『六合雑誌』（三五、三七）に採録されるほど内村はその名を全国的に高めた。

大会のハイライト

一方、新島はといえば大会初日の閉会祈禱に続いて、二日目の午後に井生村楼で「伝道論」について講演した。が、なんといっても圧巻は一一日午前の聖餐式での説教である。陪餐者は内外人を合わせておよそ四百人であった（『七一雑報』一八八三年五月一一日、二五日）。

新島は、キリストが弟子たちの足を洗ったという聖書の箇所（ヨハネによる福音書、第一三章一二節―一四節）をテキストに赤心を吐き、「会衆一同に最も大なる感動を与へた」（佐波亘編『植村正久と其の時代』二、五六四頁、一九六六年、教文館）。

新島に対して終生、強烈な批判者であった植村正久ですら、この日の出来事はいつまでも脳裏に焼きつけられた。植村は、「キリストがその席に立ち給うことを深く感ぜしめられた」とも「キリストの咫尺（しせき）に侍るような思いをその時ほど深く、強く感ぜしめられたことはない」と後年にいたるまでしばしば物語ったという（同前）。

さらに、「第二〔三〕回全国基督教徒親睦会のあった節、

基督教伝播の勢甚だ盛んであったので、新島の熱情燃え上り、彼をして伝道の成績を胸算的に予想せしめ、国会開設の暁に於ける基督教の勢力云云なるべしと絶叫せしめたのである」とも書き留めている（『植村全集』七、五三〇頁、一九三二年、同刊行会。傍点は本井）。よほど印象的な光景であったらしい。

ちなみに、小崎弘道は「此会合にて来会者一同に与へた信念は十年ならずして我国は基督教国となるであらうと云ふことであった。又少なくとも二十三〔一八九〇〕年に開かるる最初の国会に選出さるべき代議士の多数は基督信徒であらうとの確信であった」とのべているものの、発言者を特定することはしてはいない（『七十年の回顧』七一頁）。

他の参加者の一人も、聖餐式が「予の心に非常の感銘」を与えたことを特記し、「新島氏の講説の如きは予が心胆を寸断に細截し去れり、神よ願はくは此の善良なる感格〔銘〕を永久予が心に保存せしめたまへ、江湖の兄弟中必ずや予と同感の君子多からんと信ず」と書き残す（『六合雑誌』三四、三二四ページ、一八八三年五月三〇日。カタカナはひらがなに代えた）。

新島の説教

この時の異常に高潮した大会の雰囲気は、新島が説教中に用いたと伝えられる次の言葉、すなわち「十年ならずして我国はキリスト教国となるであろう」（『植村正久と其の時代』二、五六四頁）によく窺える。まさに「聖晩餐式に列席したる四五百の会衆一人として感涙に咽ばざる者なし、一同十年を出でずして我国を基督教化すべしとの希望を以て散会したり」である（高木壬太郎『基督教大辞典』九八七頁、一九一八年、警醒社）。

大会の終了時に内村もまたあふれ出る感動を日記に率直に認めた。

「五月十二日、大会終了、素晴らしい効果を得た。教会は信仰復興し、良心は試練され、愛と一致は著しく強められた。大会は一般にペンテコステ的であった。」（益本重雄・藤沢音吉『内村鑑三伝』九九頁、一九三五年、同刊行会。傍点は本井）

一方、押川も大会のさなかに自己の牧する仙台教会（吉田亀太郎）にあてて次のように打電したことが知られている。

「御霊下り、非常の時来た。大説教をなす。励みて祈れ。

信じて祈れ。皆集りて祈れ」（『東北学院百年史』一二七頁。原文はカタカナで句読点なし）

あるいは新島の説教に触発されての行動ではなかったか。

さいわいにも当時の新島の説教草稿（「基督弟子ノ足ヲ洗ヒ賜フ事」と仮題）が『新島襄全集』（二、一〇七―一一一頁、一九八三年、同朋舎出版）に収録されている。それには内村の日記にも見られた「ペンテコステハエルサレムニアリ東京□□（ニモアリ、か）」の一句は残されているものの、周知の「十年ならずして云々」の一文はどこにも見当らない。

植村が回想するようにはたして新島がこれを「絶叫」したかどうかは、確認する術がない。かりに事実とすれば、新島は会衆の熱気に煽られてかアドリブ的にこれを挿入したことになる。

さらに海老名弾正は、新島は「例の〔密出国で〕渡航の際船長に足蹴りにされたくやしさに、一度は彼を暗殺しようとしたけれども、それを断腸の思ひで、思ひ止った事情を語ったやうに記憶する」とのべている（『植村正久と其の時代』二、五六四頁）。実は説教草稿ではその下りは次の通りである。

「予ハ船中ニアリ甲比丹ノ足ヲ洗ヒシトキノ心持チ、愛ヨリ其人ノ足ヲ洗ヒシニアラス、僕ノ位ニアリ、命セラ〔レ〕ショリ其足ヲ洗ヒタリ　心平ナラス」（『新島襄全集』二、一〇八頁）

海老名に強烈な印象を与えたこの箇所は、説教の全体からすれば単なるひとつの例話にすぎなかった。が、おそらくこの時の新島の姿は、弟子の足を洗うキリストのそれと二重写しになって聴く者の胸に迫ったのであろう。

説教の力点そのものは、「宗派異ナルモキリストヲ学得ヘシ、一致シ得ベシ」、すなわち、今回の大会は「競進会ノ類」では決してなく、キリストの愛を学んでお互いに遜れば、教派をこえて「一致」が可能である、という点にあったと思われる。新島からこの日付で大会の報告を受けとった宣教師（M・L・ゴードン）によれば、用意した説教が不要なほど、集会はすでに熱狂的に「一致の理想」に燃えていた、ともいう（The Missionary Herald, Aug. 1883, p. 456）。

これに対して、新島のいまひとつの説教「伝道論」の草稿はない。けれども、仏教系の『明教新誌』（一八八三年五月一四日、小沢三郎編『明治十六年の基督教』所収）には、会場にもぐりこんだ一仏教徒が次のようにその要旨を紹介しているので、輪郭をつかむことは可能である。

「新島襄氏（西京）が伝道論と云ふ題にて伝道に二あり第一直接伝道とは吾人の精神なり第二間接伝道とは著書新聞誌学校の三にして著書を以ては基督教の主義を下は世間の学士より上は口より耳へ直に教化し能はざる九重の天にまで布教し新聞誌を以ては基督教真理を寒村僻邑に住する翁媼に至るまで知らしめ且つ今日世上の新聞が日々に道義を失し其猥褻なる親子相対して読むに忍ひさる如き事を記載したる新聞のみなれば比弊を一洗し世人の徳義を振起することを勧め学校は世の少年子弟を養生し他日少しく学識あるものは悉〳〵く基督教の信者たらしめんことを期す云々と其言論最と心切に聞へたり」

「すべての人が声をあげて泣き出した」

さて、新島が説教の中で各教派の一致の精神を力説したことは、彼が大会直後の京都の教会員たちにあてて報じているところからも確認できる（『新島襄全集』三、二三六頁、一九八七年）。英文書簡ではその点がさらに明瞭に示されている。

この英文書簡は、五月一一日と一二日（すなわち説教当日とその翌日）とに同志社の外国人教師（宣教師）たちに送られたもので、聖餐式が大会中の「最も恵まれたプログラム」であったことと「すべての人が声をあげて泣き出した」ことが明記されている点でも注目すべきである。説教自体が声涙ともに下るものであったことを裏付けてくれる。

この書簡は、『新島襄全集』六（二一九頁、一九八五年）ではJ・D・デイビィスの引用に基づきわずかに冒頭の部分しか収録されていないうえに、両者には多少の差異（修正）が散見されるので、次頁にあらためて、活字となっている全文をアメリカン・ボードの機関誌（The Missionary Herald, Aug. 1883, p. 299）から引いておきたい。

「畏ろしい人物」

第三回日本基督教徒親睦会は、参加者の一人ひとりの胸中に消え去り難い刻印を残して成功裡に終った。

大会から戻った新島をつかまえて、「誰か新しい人物に出会いましたか」と尋ねた者がいる。高梁（たかはし）にいた松村介石である。新島は即答した。

「出会った。二人の人物に出会った。一人は内村鑑三、一人は押川方義である。内村は非常な学者で、押川は畏ろしい人物である」と（松村介石『信仰五十年』一二〇

Dr. Gordon has forwarded the following extracts from a letter of Mr. Neesima to the missionaries at Kioto, dated Tokio, May 11th: —

"I am anxious to write you a few lines telling how the Lord blessed us in our great fellowship meeting. We commenced iton Tuesday with a one-hour prayer-meeting. It was the most impressive service I ever attended in my life. A spirit of union was greatly manifested in that meeting. In the afternoon we had reports from the delegates. It was a most enjoyable part of the conference. I can assure you that the Lord blessed us far more than we asked for. On Wednesday we had a prayer-meeting from eight to nine A.M.; business meeting, nine to twelve A. M.; public meeting for speaking, in the afternoon. About seven hundred were present. Thursday's programme was just the same. I preached this morning at the communion service. There was an hour of prayer-meeting before the communion. Mr. Okuno served at the communion table. It was the richest part of the meeting. All the people burst into tears.

"For this afternoon, topics on personal faith, education of preachers, and selfsupport were brought out for discussion, but I found myself so exhausted I did not attend. There is, a perfect union between the native brethren and the missionaries, and these two united parties are happily united in the Lord.

"May 12th. I will add a few more lines to my yesterday's note to you. I attended the union prayer-meeting last night. The house was completely filled for the largest prayer-meeting I ever attended in Japan. It commenced promptly at eight P. M., and closed at ten P. M. No vain and useless words were uttered either in remarks or prayers. Three or four persons stood up at once, and the leader of the meeting was obliged to ask others to wait until one finished. At the same time they seemed calm and serious. There was no undue excitement. The sprit of union was wonderfully manifested then. Numbers of our native brethren confessed that they have been very ungrateful toward the missionaries, and begged their pardon for it. A few missionary brethren made very impressive remarks, and seemed so glad and happy. Yesterday's plan was, if it should rain to-day, to have a regular jolly *shimbokukuwai* (social meeting), but some moved to change it to a thanksgiving and prayer-meeting, and the motion was carried by the claps of hands. The meeting for lectures on Monday was also changed to a regular preaching service. I can assure you that the Lord has given us far more than we asked for."

大会の消息を伝える新島書簡（冒頭以外は全集未収録）

頁、一九二六年、警醒社)。

これにより親睦会が新島と押川とを初めて結び合わせたことが判明する。ただ松村は、このエピソードを語る際には、「畏ろしい人物」に代えて「恐ろしい人物」と表記する場合がある。

すなわち、最初にこの挿話を『道』一三二(七〇頁、一九一九年四月号)で紹介して以後、『信仰五十年』(一九二六年)や『道』二三六(五九頁、一九二八年二月号)では前者のごとく表記するが、『道』三四二(一四頁、一九三六年一二月号)にいたって「恐ろしい奴」に代えられている。そのためか近年、道会から復刻された『信仰五十年』(一一二頁、一九八九年。ただし『松村介石』と改題)では「恐ろしい人物」とされている。

おそらく新島にとって押川の第一印象は「畏ろしい人物」の方でなかったか。大会中の押川の講演「基督教に適するものを教ふ」に新島は「いたく感動」した、と伝えられているからである(『東北学院百年史』一三〇頁)。

仙台伝道をめぐって

押川に対する新島の畏怖は、大会より二年後に新島が仙台伝道に着手しようとする計画——正確にいえばアメリカン・ボード北日本ミッション(新潟ステーション)を仙台へ拡張させる計画——を真剣に考慮し始めた時もまだ活きていたと考えられる。

事実、アメリカで静養中であった新島は一八八五年の一月に、「我々の良友、押川氏は我々がかの地〔仙台〕へ進出することに反対しないと思う。彼はきっと我々を歓迎し、一致して共に働いてくれるであろう」との期待感を表明している(『新島襄全集』六、二五二頁、原文は英文)。五月にも彼はアメリカから東京の小崎弘道に対して次のような依頼を寄せている。

「仙台地方の伝道について調べ上げてもらいたい。押川のほかに仙台伝道に着手したミッションがあるのか。宣教師は誰かかの地へ赴任したか。〔中略〕仙台あるいは福島に我々が進出することを押川氏がどのように考えているか教えていただきたい。」(同前二六六頁、英文)

新島からのたび重なる懇請をうけて、小崎は八月から九月にかけて東北地方を巡回した。仙台では当然、両者で会談——おそらく友好的な——がもたれたはずである。

この機会を捉えて仙台の劇場で開かれた説教会では、小崎は「押川方義君の前座」をつとめている。小崎に対して聴衆が騒ぎ立ったので、「彼が語る所は諸君を益する

点少からざるべければ」静聴するように、と押川が騒ぎを静めるという一幕もあった（『七十年の回顧』七三―七四頁）。

組合教会による仙台伝道は火急の策、と新島には考えられていた。人事についてはすでに意中の人――長谷川（中島）末治か辻密太郎を仙台に、そして長田時行を福島に（『新島襄全集』六、二五二頁）――すらいた。ただ新島にはすでに仙台教会（今の仙台東一番丁教会）で着実な実績を挙げている先駆者の押川に対する懸念、あるいは配慮をまったく無視するわけにはいかなかった。

とりわけ気がかりなのは、さきの大会時には無教派（独立）であった押川がこの頃、一致教会（長老派）――組合教会の良きライバルであった――に急接近し始めたことである。

この点に関し新島は、「押川氏は一致〔教〕会に入った。けれどもこれまで通り寛大だと確信する。彼は決して排他的な教派主義者〔セクタリアン〕とはならないであろう。彼とは親密な関係を保っておかれたい」と小崎に伝えている（同前二七二頁、英文）。

O・H・ギュリックと押川方義

結局、この時の新島の計画は水泡に帰した。ひとたびは新潟ステーションのO・H・ギュリックが仙台に住宅まで構えた、にもかかわらずである。「仙台は最近、O・H・ギュリック牧師により占拠された」との新島の喜びは（同前二七〇頁）、糠喜びに終ってしまった。

ところで、このギュリックの仙台進出は新島の意向とはまったく無関係に彼独自の判断で行動に移されたのであるが、それがかえって裏目に出てしまった。最終的には他の宣教師たち（日本ミッション）の承認がとれず、新潟から福岡へ転任を命ぜられてしまった。

そもそもギュリックは押川の力量と人物とを高く評価していた。ギュリックによれば当時の押川は世界のどの教会とも関係をもたない「完全な独立性」を堅持していた。新潟時代に押川が助けたT・A・パーム（エディンバラ医療宣教会所属の宣教師）を通して月額三十円の資金援助を受けていたからである。

しかし、一八八五年の春にいたってその援助の打ち切りが決定したので、押川はきゅうきょ上京し、諸教派の宣教師たちと接触し協議を重ねた。その結果、長老派の

協力をとりつけることに成功した。かくして、それまで無教派であった仙台教会は急速に一致教会色を強めるにいたるのである。もっとも、同教会が日本基督一致教会に正式に加盟が認められるのは半年後の一一月のことである（拙稿「T・A・パームとアメリカン・ボード北日本ミッション」一八九頁、『潟』四、一九八七年、日本基督教団新潟教会）。

ギュリックが独自の判断で仙台転出を企図したのは、まさに押川がこうした転換期のさなかにいたころであった。帰国したパームからの依頼に加えて、押川への心からの傾倒が彼を仙台へ引きつけたのである。アメリカン・ボードが仙台教会をあらたに財政的に支えるべき好機、との判断がパームとギュリックとの双方にあったのであろう。

ギュリックは四月に下見のため仙台へ赴いた。東京より帰仙した押川と二九日に協議を行なうことができた。

会談の結果、押川にはセクトをつくる意向がまったくなく、教会員ともどもギュリック（したがって組合教会）の進出を心から歓迎してくれることが判った。そればかりか、押川は「ギュリックの来仙を前もって知らされていたら、他教派の援助を求めにわざわざ上京しなかった」旨をギュリックに洩らすほどであった（以上、拙稿「アメリカン・ボードの日本伝道　一八八三―一八九〇」一二六頁、『同志社アメリカ研究』二四、一九八八年、同志社大学アメリカ研究所）。

この時の押川の印象はギュリックには強烈であった。大変な好人物であるうえに英語と弁論とに秀でていた。とりわけ雄弁術に関しては現存の日本人中、右に出る者がないといってよく、まさに立て板に水である。さらに指導力の大きさの点でも横井時雄――今治教会の牧師時代、押川の母（橋本只子）に授洗した当の人物――に匹敵するほどである、という。この点はパームの押川評とも共通する。一八七六年に押川が越後に赴いたとき、パームは押川の雄弁ぶりと聖書理解の深さとに驚かされた。ただ英語力はどんな物でも読みこなすだけの力はもってはいるものの、英会話は不得意であった（Quarterly Paper of the Edinburgh Medical Missionary Society, May 1875-Feb. 1879, pp. 72-73）。

ギュリックはパームもこれほどまでに評価する押川となんとしてでも東北伝道を共に担いたかった。そのため六月にも再度、仙台を訪れ、住居まで定めた（拙稿『パーム・バンドの教会形成（三）」一七八頁、『潟』七、一九九〇年）。

アメリカン・ボードがギュリックの福岡転任を決議し

て在米中の新島をいたく失望させたのは、この直後のことであった。「ギュリック氏をぜがひとも仙台にとどめさせよ」というのが彼の強い願いであった。なぜなら、「もし彼が仙台を引き揚げれば、我々が同地を占拠する機会は二度とこないであろう」からであった（『新島襄全集』六、二七五頁、英文）。

「恐ろしい人物」

かくして一八八五年の夏は、新島にとっては仙台に組合教会（アメリカン・ボード）の橋頭堡を確保するという願ってもない好機を逸するという失望の時となった。そればかりか、アメリカン・ボードの決断は押川を結果的には一致教会に追いやる手助けとなったとさえ考えられる。

けれども、新島の失望は失望のままで終らなかった。翌々年、組合教会系の学校設立運動が仙台でわき起こり、「東華学校」となって日の目を見たからである。校長には新島その人が就任した。同校の開校は、押川たちによるいまひとつのキリスト教系学校を設立する動き――のちに仙台神学校（今の東北学院）として結実――と正面から競合したために新島と押川とは、種々の「軋轢」を経験することはよく知られている。例の教会合同問題においても事情はほぼ同じであろう。

さらに新島の最晩年（一八八九年から九〇年にかけて）にも新島は福島伝道をめぐって今一度、押川と「抗争」をくりかえす。

こうした衝突を通して新島の押川観は、第一印象の「畏ろしい人物」から徐々に「恐ろしい人物」に変容していったと考えられる。

その間の「軋轢」や「抗争」についての詳しい消息は別稿に譲りたい。（同志社大学人文科学研究所協力研究者）

新島襄をめぐる人々

石井十次と新島襄
――〝底辺にむかう志〟にむすばれて――

小倉襄二

I

福祉は、すでに、この時代のキイ・ワードである。イメージをふくめてその内実は多様で、関心にしたがっていろいろの局面で生活の主題に深くかかわっている。現実の福祉のシステム、政策には歴史の背景が存在している。西欧、日本、それぞれに「社会事業史研究」として扱われてきた。この研究の特徴の一つに、人物像として福祉の考え方＝思想、その人物の実践の軌跡を辿るという作業がある。小稿のテーマとしての石井十次も幾多の社会事業史研究に位置する一箇の人物として著名である。彼は社会事業史上の群像のなかでも一つの巨峰として確たる歴史に視えている。

近代日本における社会事業史のなかで石井十次は「岡山孤児院」、一八八七（明治二〇）年の創立者として知られる。今日での児童福祉、とくに身寄りもなく、あるいは、成育に困難をもっていて養護を要する子どもたちの救済についてのとりくみを行った開拓者である。一八六五（慶応元）年四月十一日に宮崎県児湯郡上江村で生を享け一九一四（大正三）年一月三〇日に同県茶臼原で永眠、四十八歳の生涯であった。

柴田善守氏の『石井十次の生涯と思想』（春秋社・一九六四年刊）によれば、その生涯は五期に分けうるという。(1)明治一七年まで、(2)明治一七年より二十二年まで、(3)明治二十二年より三十年頃まで、(4)明治三十年より四十年頃まで、(5)明治四十年以降となる。第一の時期は石井十次の思想の明確化への前期、第二は生涯の事業として救済事業を選び、そのための苦悩の時期、第三は岡山孤児院の経営と創立期の困難、それを克服する時期、第四は孤児院の事業が一応成功し社会的評価をもうけた時期、第五は、事業のゆき詰り、孤児院の閉鎖、宮崎県茶臼原と大阪において新たなる事業の発展を希いつつ永眠に至る区分である。

この区分された時期は、日本の明治維新を経て、その近代化の展開、それに伴う社会的諸矛盾の激発した波瀾の時代相であった。年譜によれば、石井十次は十九歳、一八八四（明治一七）年、夏に岡山よりの帰郷の船中で、新島襄の「同志社大学設立の趣意書」をよみ、大いに感激して、教育事業のいかに重大なるかを覚知したといわれている。この期に至るまでに、たとえば、西南戦争は石井十次の思想形成に影を落している。父万吉は西郷隆盛の部下として参戦、石井十次の反藩閥の激越な心性を伺う事件は十五歳の時に宮崎県、飫肥地方で、政府を弾劾、岩倉具視右大臣暗殺の必要を論じて検束され五十余日の禁獄に処せられている。さらにキリスト教との出会いは十七歳の折、友人の妹が宮崎の遊廓の娼妓に堕ちたのを奔走して救済したが、その間に病を得て医師萩原百々平の診察をうけ、医師たらんとする希いと、キリスト教への入信を決意、キリスト教の宣教が盛んで医学校もあった岡山へ向い、岡山県甲種医学校に入学、一八八四年、十九歳で前述のように新島襄のアッピールに感動、ついで同年十一月に金森通倫により洗礼をうけて岡山基督教会会員となった。一八八五（明治一八）年の夏に『西国立志編』を読み、巻中のジョン・パウンヅという貧しい靴修理工が貧困児童をあつめて教育をほどこし五〇〇人に及ぶ貧児を救済した箇所にふかく感ずる処があり、「予は他日必らず予には神バウンヅに倣はしめ玉う日の

来ることを信ずるなり」と記して、その使命を予感している。金森通倫による受洗から彼のキリスト教信仰は深くなったが、生い立ち、家族、郷党の石井十次への期待とその貧児救済への希求との相剋のなかで、彼の日記には精神狂錯、悶錯、頭痛、躁鬱の苦悩に呻吟する日々が訪れたことが記されている。この時期をこえて、医師代診のなかで、一八八七（明治二〇）年に、前原つね、その子定一、マサノなどの孤児を救済、当時の日記には個人の事業を超えて協力による「慈善会」を志したことが明記されている。事業目的として、有為貧生学資輔助、孤児貧児教育、貧困者施療、盲唖教育、育児、監獄伝導をあげ、会員制、金米、物品の拠出、慈善家有志への義捐金募集を策定している。この段階を起点に多彩な新島門下につどう慈善救済事業の人脈との交流を通して、石井十次の岡山孤児院経営を軸とする偉業が展開することになる。

II

いまの〝福祉〟のシステムには社会福祉事業の領域がある。石井十次の孤児院はとりあえず、養護施設にあたる。今日の、「ゆたかな社会」の文脈での児童の養護を当時の孤児救済とただちに系譜としてむすびつけることはできない。そこには、貧困と残酷、そして人々のくらしの暗部が「下層社会」として拡大していた。差別や抑圧が怪しまれぬ社会であった。一八七五（明治八）年十一月、官許同志社英学校が新島襄によって創設されたこと、石井十次が同志社にかかわっていく約十余年後の段階に、この貧児救済に集中表現される社会問題（下層社会問題）はその悲惨と困苦の度合をつよめていった。新島襄の創設した同志社は、新島の直接、間接の感化、人格と思想のパラダイムを通してこの社会問題に志をいだく幾多の逸材を世に送ることになった。前述のように石井十次もその一人である。石井十次の盟友でもあり彼の人と仕事の理解に篤い人として留岡幸助（一八六四―一九三四）がある。奇しくも留岡幸助は岡山県高梁の出身、同志社より派遣された金森通倫の説教により入信を決意している。留岡幸助は新島の同志社についての感銘を語ったが〝同志社では自分ほど新島先生の恩顧を蒙ること薄きものはなかったが、新島先生の在ることが不言にして教え、不文にして化育を与えるものであり、新島先生のライフ其物が何事にも優って偉大なる伝道であり、宗教であった。〟留岡幸助は、新島襄を親方風の人と視て、その暖い恩愛、思いやりに触れて、熱誠の人とよび〝夫れ智を以てするものは、智を以て欺くべし。只先生の如く熱情、熱誠を以て終始する人は欺くべからず、又欺く

に堪えない〟とも語っている。留岡幸助は周知のように当時の感化教育（いまの教護院事業）としてわが国でもっとも先進―開拓的な施設―「家庭学校」一八八九（明治三二）年を石井十次の「岡山孤児院」に遅れること十二年後に開設し、慈善問題、監獄改良、地方改善などにもっとも大きな足跡を印した同志社の底辺にむかう志にむすばれた人物である。石井十次の周辺には、その熱誠を人に与えて止まぬ無私のキリスト者としての志に共感する人々の輪があった。その交流と共感の〝広場〟として同志社があった。柴田善守氏によれば、石井十次の人物像を語るときに安部磯雄、徳富蘇峯、山本徳尚、さきの留岡幸助、そして山室軍平をあげて、それらの人との交流と石井十次に寄せる支援と評価の高さを指摘する。すべて、石井十次をめぐる同志社の人脈である。たとえば、山室軍平（一八七二～一九四〇）も、岡山県の出身、同志社に学び、〝救世軍の山室〟としてわが国での救世軍の展開、婦人保護、とくに廃娼運動、救済事業の各般にわたる世界的レヴェルの働きをした人物である。山室軍平は、一八八九（明治二二）年頃より、岡山孤児院に出入して石井十次と知りあった。当時、同志社の学生であった山室軍平と一八九一（明治二四）年の濃尾大震災の災禍にあたり孤児救済に努力、この年末までに九十三名を救済、名古屋に震災孤児院を開設した。こうしたかかわりのなかで、石井十次との交友は密接となり、さらに、一八九二（明治二五）年に石井十次が病を得て同志社病院（一八八七年八月設立）に入院、この病院は、新島襄が創立、監獄改良で著名なドクター・ベリーを院長として経営されていた病院であった。山室軍平の述懐によれば〝この入院時に救世軍の創立者、ウイリアム・ブース大将の『最暗黒の英国及び其の出路』の一書を、石井君は英語を解しなかったから、当時同志社の上級生の一人であった山本徳尚君に頼み、毎日それを枕頭で訳読してもらうことになり、それを又私（山室）が毎日ノート・ブックを持って行って、そばから筆記し、石井君の為に後日の参考に供した。こんなことから私は石井君におつきあいして最暗黒の英国を読むことになった不思議な因縁を未来永劫忘れることは出来ないであろう〟といっている。石井の日記では一八九一（明治二四）年に救世軍の記事があり、同年十月に東洋救世軍の名があらわれている。石井十次、山本徳尚、山室軍平のこの交誼のなかで、山室軍平は始めて救世軍というものを知ったといっている。このことが後年の救世軍中将山室に至る導きの刻であったかと思う。石井十次にとっても、この二人の同志社学生によって、ブースの主張を知り、後の茶臼原

に開設した農業部、孤児院に楽隊を設けるなどの直接の啓発を得たとのことである。とくにブース大将の〝私は実行の人である〟という一句は、山室軍平によれば当時の石井君を感激せしめたことが如何ばかりであったかと追憶する。

山本徳尚も同志社に学び、北海道の囚獄に教誨師として働く、後に東京市養育院、井ノ頭学校などで感化教育にたずさわる人物である。〈監獄〉と〈遊廓〉は、明治の代に二大暗黒とよばれた。「下層社会」のなかのもっとも闇の深い部分であった。石井十次、山室軍平、留岡幸助、安部磯雄、対応する場の状況差こそあれ新島襄の、不言の化育にうながされて〝底辺にむかう志にむすばれた人々〟といえるのではないか。

III

一九〇六（明治三九）年に留岡幸助は、その主宰する『人道』に石井十次と岡山孤児院についての所説を載せている。これによって、石井十次の生涯をかけた孤児院経営の一端を紹介する。〝今、岡山孤児院の発達せる経歴を尋ぬるに、今を距ること二十年前、三人の孤児を見出して教養したるに、今や男女の院児一千二百名を養ひ、建築家屋五十棟、教師保姆及事務員百二十人、開墾地七十町歩、及天下数万の同情者を控へて、盛んに孤児教養事業を経営しつつある点を以て見れば、孤児院も亦驚くべき発達を遂げたるものである。、徳富蘇峯先生によれば、石井君に戯語して曰く「君は孤児院長に非ず孤児村の村長也」と。〝吾人は岡山孤児院の発達は汗であり、涙であり、血であると言いたい〟と。孤児院の経営について、さらに留岡幸助は〝石井君は日本で一番見識のある腹の緊（しっか）りした信仰の固い慈善家であると評した。祈りと慈善の事業は神の働きの補助であり、活版部、麦稈を編み、米搗、散髪、馬秣など労作により、孤児の自活、自助を奨励した。また、一八九五（明治二八）年には、岡山孤児院憲法として、第一、「目的」―天下無告の孤児を救済し其父母に代って養育するを目的とす、第二、「入院」―六歳以上十二歳以下のその何国を問わず幾名にても入院を許す（無制限収容の実践）、第三、「維持」―天父の冥助と院内各自の労働とに由って之れを維持拡張し、敢て寄附金品を受けず、第四、「教育」―男女既でに一定の年齢に至れば昼間は実業に従事せしめてそれがパンを食はしめ夜間は文学技芸を学ばしむと定めた。労働自活の宣言、実業教育、孤児をして将来の苛烈な社会生活に備えること、労働自体の尊厳を体得せしむることを根幹としていた。祈りにくわえてルソーの「エミール」の自然の教養につよく感動して実践を志した。この年、コレラが

院を侵し、伴侶の晶子夫人永眠の苦難をこえて、郷里日向の茶臼原に六十名の年長男児によってエミール教育法による殖産、商業、開墾などに尽力する。挫折もあったが明治三〇年代を通して孤児院は整備され、有名な家族主義、満腹主義、宗教主義、実業教育などの十二則によるあくなき創意と工夫をかさねた経営を行った。英国のバーナード孤児院の十人程度の小集団に小寮舎をあたえ、それぞれに一人の「主婦」を配して児童の養護を担当する近代システムを大胆に導入、食糧放任として貧苦の性ゆえの盗食を防除（満腹主義）などの工夫もかさねた。石井十次の晩年、一九〇九（明治四二）年には、大阪事業と称されるものへ進出、大阪市南区愛染橋詰に夜学校、保育所、同情館などを開設している。

柴田善守氏によれば石井十次は国家、天皇、華族制、資本主義などに対して全くといってよいほど批判を加えていない、しかし孤児院創立期に安部磯雄の社会主義思想の影響もあり、〝民を養ふに小恵を以てせず、宜しく社会の組織を改革して万民各々其の堵を安んずるの域に至らしむべし〟の言もあった。一九二六（大正一五）年十月に岡山孤児院は解散するがそれまで倉敷紡績株式会社社長大原孫三郎は、若き日々石井十次の感化をうけて、終生、彼の事業を支え、石井の歿後にはその事業を継承、さきの大阪事業の地に石井紀念愛染園を開設、それを基礎に戦前、戦後の社会科学研究のメッカとしての「大原社会問題研究所」（現在・法政大学）へと連っていく。

新島襄が自由民権論者との交際接近のあったことは、『新島襄』（和田洋一著・日本基督教団出版局、一九七四年）に紹介されている。この思考と福沢諭吉を俗物主義、利己主義、射利求名の訓誨をなすものと批判し、智徳兼備の平民、人民の養成をと新島は祈念した。私には、直接的な新島襄と石井十次のかかわりについては探求の不備により不明である。〝東に奔り西に走る〟（和田洋一氏の表現）そのように新島襄は同志社のための傷疾に苦しむなかでの不言にして教え、不文にして化育する。この新島の同志社に集い、それぞれの生涯に交錯した有名無名の群像と今日に至る系譜を日本社会事業史研究のなかで私は仮りに「同志社派」とよんでいる。石井十次はその新島にうながされて底辺にむかう志にむすばれた「同志社派」の比類のない祈念の〝福祉〟実践者であったといえよう。

（大学文学部教授・社会問題）

参考文献

柴田善守著『石井十次の生涯と思想』、同志社大学人文科学研究所編『留岡幸助著作集』、和田洋一著『新島襄』、小倉他共著『人物でつづる近代社会事業の歩み』、和田洋一編『同志社の思想家たち』(下)など